

第3章 特別支援学校の特性に関するメタ評価と実践事例

1. 特別支援学校における特別支援学校の特性を踏まえた学校評価の実践

(1) 質問紙調査結果に基づいた特色ある実践校抽出

質問紙による調査の回答内容を精査し、特別支援学校として特色ある学校評価を実践していると判断される学校を抽出した。

1) 抽出の観点

a. アンケート回答から

- ①自己評価シートの構成
- ②評価の基準
- ③評価の観点
- ④評価の実施体制
- ⑤学校関係者評価、第三者評価の評価者

b. その他の情報源による情報

- ①学校ホームページによる評価の公表
- ②設置者の学校評価についての取組み
- ③その他、学校に関する情報

2) 抽出作業

本研究分担者が、アンケート結果を上記の観点について障害種別に分担して精査し、その結果を踏まえて、上記bに関する情報を考慮して、特別支援学校として特色ある取組をしていると思われる学校を抽出した。

3) 結果

抽出された学校とその特徴を、表3-1に障害種別に示した。

表3-1

知的障害	
A校	<ul style="list-style-type: none">・各学期ごとと年度末の4回評価を実施している。・多くの評価項目において、詳細な項目を設定している・評価の活用システムの構築について評価している。・就労について力点が置かれている。・特別支援学校の特性を踏まえた学校評価に取り組んでいる。

B校	<ul style="list-style-type: none"> ・年に1回の評価及び中間評価を実施している。 ・多くの評価項目において、詳細な項目を設定している。 ・アクションプランの策定及び評価による見直し・改善が機能している。 ・評価項目の中で重点評価項目を定めている。 ・評価の一部を数量化している。
C校	<ul style="list-style-type: none"> ・年に1回の評価及び中間評価を実施している。 ・中間評価の実施を、下半期の改善に活用している。 ・保護者へのアンケートにおける質問・意見に対してすべて回答している。 ・多くの評価項目において詳細項目を設定している。 ・特別支援学校の特性を踏まえた学校評価に取り組んでいる。
D校	<ul style="list-style-type: none"> ・上記のC校に傾向が似ている。 ・学部間の縦のつながりを重視した教育活動の評価を行っている。
E校	<ul style="list-style-type: none"> ・県の統一様式に、独自の項目を加えて学校評価を実施している。
肢体不自由	
F校	<ul style="list-style-type: none"> ・以前学校評価に関する、研究指定校を受けており、組織的に学校評価に取り組んでいる。第三者評価を行っている。 ・2回目の評価の際には、低位の項目を再評価している。
G校	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校の教職員の専門性に関する評価項目を設定している。 ・学校評価の活用に対して、学校評価が正式に実施された際に、従来より校内で実施していた各学部と各分掌による年度末反省（年度の目標と反省）に取り組む形でシステムを構築した。 ・項目は多岐にわたるが、各学部、寄宿舍、各校務分掌の実態を反映したものとなっている。
H校	<ul style="list-style-type: none"> ・年3回の学校評価を行っている。
I校	<ul style="list-style-type: none"> ・マークシート方式の評価システムを導入している。 ・寄宿舍生からの評価を行っている。
知・肢	
J校	<ul style="list-style-type: none"> ・第三者評価も実施している。 ・学校評価を学校改善に結び付けようとする意欲が感じられる。
K校	<ul style="list-style-type: none"> ・重点目標を定め、達成度の判断基準も設定している。
L校	<ul style="list-style-type: none"> ・第三者評価も実施している。 ・学校評価に対して熱心に取り組んでいる。
聴覚障害	
M校	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害の専門性に基づいた学校評価を行っている。 ・重点項目を3つ挙げている（子どもの楽しい学習、地域支援、職員の専門性）。 ・比較的わかりやすいチェックリスト形式の評価シートを採用している。 ・年2回、中間評価と総括評価を実施している。第三者評価は実施していない。 ・学校改善へのサイクルは、十分に明確とは言えない。
N校	<ul style="list-style-type: none"> ・学校経営方針にリンクした評価、重点項目を設定して評価を行っている。 ・一学期末、中間、最終の3回学校評価を実施している。 ・中間評価で、経過と改善方策を記述している。

○校	<ul style="list-style-type: none"> ・比較的簡略な自己評価シートを使用している。 ・児童生徒アンケートと保護者アンケートを実施している。 ・学校評価検討委員会を設置している。
P校	<ul style="list-style-type: none"> ・県が「県立学校における学校評価実施に関する留意事項」を定めている。 ・教育委員会が作成したP-D-C-Aサイクルの流れ図を、学校評価に用いている。 ・評価結果が数値で示されている。
Q校	<ul style="list-style-type: none"> ・県の教育委員会が、評価委員を選定して第三者評価を行っている。 ・「子どもの力を引き出す」、「専門性を持つ学校」、「子どもの多様なコミュニケーションを育てる」といった重点目標を設定して評価を行っている。 ・自己評価シートは、比較的簡略である。
R校	<ul style="list-style-type: none"> ・県の教育委員会が、評価委員を選定して第三者評価を行っている。 ・学校全体で評価を改善につなげている。
視覚障害	
S校	<ul style="list-style-type: none"> ・寄宿舎の評価に力を入れている。 ・学校自己目標を具体的に設定している。 ・第三者評価を平成20年度から実施している。 ・特別支援教育の特性の観点では、センター的機能の評価を重視している。
T校	<ul style="list-style-type: none"> ・秋に中間的評価を実施し、目標達成度の確認や見直しを行っている。 ・重点課題を設定して評価を実施し、その結果を公表している。
U校	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育に特化した自己評価項目を設定している。 ・教育課程検討委員会が中心となって組織的に学校評価を実施している。
V校	<ul style="list-style-type: none"> ・評価のための評価にならないように努力している。 ・学校評価シートは簡潔に記されている。

(2) 学校訪問調査から

上記で選択された学校の中から、各学校の回答の内容を更に精査し、学校を選択して実際に訪問して、学校評価への取組の状況について、聞き取り調査を行った。その際に以下のような項目を中心に聞き取りを実施した。

<学校評価全体で共通する内容>

○学校評価の作業コストに関する部分

1. 学校評価が教職員にとって、過大な負担になっていないか。
2. 学校評価の項目に軽重があり、コンパクトかどうか。
3. 学校評価の軽重のつけ方について。
4. 学校評価実施の実際面について（アンケートには回答されていない問題点〔困っている点、課題となっている点など〕も含めてインタビューする）。
5. 評価内容・方法等の一貫性・継続性、見直し等について（評価方法等は一貫性・継続性を持って行おうとしているか。毎年見直していこうとしているか。見直しに関するガイドラインなどがあるか。）

6. 細かさとコンパクトさ。
7. 従前から実施されている年度末反省等と同様の点、異なっている点、負担度の変化。
8. 学校の特徴が評価に反映されているか。

○校内組織との関連

9. 学校評価の手順について。
10. 学校評価のデータの集め方。
11. ミーティングの回数。
12. 大項目を分析して、小項目を変化させるなどの評価項目の構造。
13. 学校評価関連の校務分掌の実際。
14. 学校評価の校務分掌の決め方。
15. 教職員の評価に対する意識、及び職員の評価導入後の意識の変化。
16. 教職員が学校評価をどうみているか。また、どのようにとらえ方が変わってきたか。
17. 学校評価を実施したことでどういう影響があるか。
18. 改善しにくい項目は最初から除いていることはあるのか。改善しやすい項目を取り上げようとする傾向はあるか。

○学校評価の活用について

19. これまで学校評価に類似のことが行われていたか。類似のことが行われていた場合、どこが異なっているか。学校評価の良い点、悪い点など。
20. 評価の活用の具体例について。
21. 校内組織の改編への活用の状況。
22. 位置づけなどで困った部分。
23. 校内の職員が、自校の特徴等を把握することに役立っているか。
24. 学校評価を改善に活かそうとする場合、改善しやすい点、しにくい点として、どのような点が挙げられるか。
25. 校内の再分配をする際に、より重点化したい項目に焦点化する時に気をつけること。
26. 校内資源を再分配する際に、質を落とさないようにしながら縮小する事業について。縮小の仕方はどのようになっているか（重点化、組織改編による人員削減や仕事内容の整理など、事業のマニュアル化など）。
27. 質を落とさないためにしていること。
28. 質が落ちたとしないような評価の仕方（例：この部分がうすくなったとしない）。
29. 評価が活用しやすい項目と活用しにくい項目について。

○公開の範囲

30. 公開をどの範囲まで、どのように行うかについて。
31. ウェブサイトにどの程度情報を提供しているかについて。

<設置者との関係に関連する内容>

32. 学校評価の様式は、設置者の決めたものを使っているか、学校が独自に決めているか。
33. 設置者が設定している様式を変えた部分は、どんな部分か。
34. 教育委員会としては、この学校評価を、教育行政にどのように生かしていくのか。
35. 教育委員会としては、学校での学校評価の結果がどうなっていくとよいと考えているか。

36. 設置者の様式を変える場合の要因、手続きは何かなど。

<特別支援学校に特有の内容>

37. 特別支援学校と小・中学校の学校評価の違い。

38. 特別支援学校に特有の評価内容について。

39. 学校規模、学部段階での評価。

40. センターの機能についての評価。

41. 違いの開示。

42. 分校、専攻科の違い。

43. 本人アンケートへの対応。

上記の観点から、第一次で選択された学校の中から、更に学校を選択し、実際に学校を訪問して、学校評価への取組の状況についての聞き取り調査を行った。

さらに、その学校訪問調査の結果から、本研究においては、特別支援学校における学校評価の改善・工夫について総合的に取り組んでいる先進的校として、神戸市立垂水養護学校、本人アンケートに重点を置いて学校評価に取り組んでいる東京都立調布特別支援学校について、その実践を詳細に紹介することにした。

2. 実践事例報告

(1) 神戸市立垂水養護学校

「全教職員によるP-D-C-Aサイクルを基に、主体的かつ継続的に改善を図っていく学校評価システムの確立をめざした取組」

1) 学校の概要

神戸市立垂水養護学校は、昭和51年、神戸市立友生養護学校から分離新設されて以来、神戸市の西半分を通学区域としている肢体不自由養護学校である。現在は、幼・小・中・高の4学部（109名）と訪問学級（18名）から構成されている。

教職員は、非常勤講師2名、時間講師3名を含め128名である。

幼児・児童生徒の実態は、年々重度化しており、医療的ケアを必要とする児童生徒が37名在籍している。また、在籍児童生徒数の増加により、教室不足で過密状況にある。

教育活動には「子どもの実態把握を十分に把握し、一人一人を伸ばす教育内容・指導法を研究、実践に努める」という努力目標に基づき、取り組んでいる。

2) 垂水養護学校における学校評価への取組

学校評価は、平成19年に文部科学省から示されている「学校評価ガイドライン」に沿って、全国の学校・園で義務化された。垂水養護学校では、平成18年度に文部科学省の「義務教育の質の保証に資する学校評価システム構築事業」における推進地域である神戸市の協力校のうちの一枚として、研究指定を受けた。神戸市に委ねられた主な取組は、「外部評価委員会が行う外部評価の際に、学識経験者等を派遣することで、評価の客観性や専門性を高める」研究であった。以後、垂水養護学校では、学校評価に精力的に取り組んできている。その経緯は、以下のとおりである。

平成 18 年度：義務教育の質の保証に資する学校評価システム構築事業実践研究指定（2 年間の 1 年次）。年度末教育反省において現行の中期目標（3 本柱Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ）を確認。

平成 19 年度：義務教育の質の保証に資する学校評価システム実践研究指定（2 年間の 2 年次）
現行中期目標（1 年次）実施。評価指標の精選・重点化。

平成 20 年度：学校評価の充実・改善実践研究委託事業実施。現行中期目標（2 年次）実施。評価指標 54 項目へ。

平成 21 年度：学校評価・情報提供の充実・改善実践研究委託事業実施。現行中期目標（3 年次）
実施。評価表を職種区分により 2 種類作成。

平成 22 年度：学校評価・情報提供の充実・改善実践研究委託事業実施。現行中期目標（4 年次）
重点課題の順序を変更（3 本柱をⅡ→Ⅰ→Ⅲの順に変更）。次期中期目標検討年次として実施。
評価指標の見直し。

3) 中期目標・単年度目標

(1) 中期目標（平成19年度から平成21年度、最長平成23年度まで）

Ⅰ 個別の指導計画の充実 --- 授業改善へとつなぐ

Ⅱ 学習指導の充実化 --- 分かりやすい授業、個に応じた学習指導の推進

Ⅲ 特別支援教育のセンター的機能の充実化 --- 地域の学校に対する支援の推進

(2) 単年度目標（本年度）

① 「本人と保護者の願いを踏まえ、共に個別の指導計画を作成する」授業改善へ。

② 「新学習指導要領に基づく授業展開を考える→個に応じた指導→授業改善」といった分かる授業への取組。知的障害教育の内容も盛り込む。

③ 「地域の学校に対する支援の活性化」についての数値目標等も盛り込んでいく。

中期目標に対応した単年度目標については、達成状況の評価結果を基に検討し、毎年、次年度目標を定めている。単年度目標の基盤となる中期目標については、3～5年ごとに全項目にわたる学校自己評価を実施して、当面必要とされる目標を絞り込んでいる。

(3) 評価項目の重点化

詳細かつ網羅的に学校評価を行おうとすると、「評価のための評価」に陥り、負担ばかりが大きくなっていく。垂水養護学校ではこうした弊害を排して、学校評価が本来の役割である学校改善に活かされるようにするために、評価項目の重点化に取り組んできている。今年度については、上記の単年度目標にみられるように、①「本人と保護者の願いを踏まえ、共に個別の指導計画を作成する」授業改善へ、②「新学習指導要領に基づく授業展開を考える→個に応じた指導→授業改善」といった分かる授業への取組、③「地域の学校に対する支援の活性化」に重点目標を絞り込み、学校の成果や課題を大きな枠組でとらえられるようにした点に大きな特徴が認められる。

4) 垂水養護学校における学校評価の方法

垂水養護学校では、学校評価については、全職員で行う学校自己評価、外部評価（PTAによるアンケート）及び学校関係者評価を導入し、その評価の客観性を高めている。

学校自己評価での工夫点は、職種の多い学校であることから、一つの指標による評価が困難であるため、授業に直接関係する職員と周囲からのサポートをする職員との2群に分けて、それぞれに

ふさわしい調査シートを作成して実施している。

外部評価として実施しているPTAアンケートは、PTAが独自に項目を検討・作成して実施しており、集計も自ら行っている。

学校関係者評価は、学校評議員（保護者代表・就学前関係施設代表者・地域関係者）及び第三者委員（学識者等）で学校関係者評価会議を構成して、年3回実施している。会議には、学校を代表して校長・教頭・学校評価委員会世話係が出席している。また、平成22年度より、第三者委員として3名の内2名の方については、肢体不自由教育経験者を招聘し、肢体不自由養護学校の教育により即した視点からの評価が得られるように配慮している。

5) 学校評価・情報提供のながれ

垂水養護学校における学校評価の年間スケジュールは、次のようになっている。

<1学期>

4月 全職員に方針提示と共通理解を進める。

5月 PTA役員会への資料提供及びPTA総会において学校自己評価の説明と評価書配布を行い、保護者への情報提供を行う。

6月 オープンスクールⅰを実施。併せて第1回学校関係者評価会議を行い、前年度の結果報告、課題の検討、今度に向けた提案を受ける。

学期末 学校自己評価①に取り組み、夏期休業中に評価の集計及び分析をし、関係分掌に改善検討を促し、2学期の提案準備を行う。

<2学期>

当初 学校自己評価の集計結果及び学校関係者評価会議Ⅰの報告、各分掌からの提案、実施。

10月 オープンスクールⅱ及び学校関係者評価会議Ⅱを実施する。

11月 外部評価の実施・集約を行う。

12月 学校自己評価②（①の低評価に絞る）を実施する。

<3学期>

当初 学校自己評価②の結果及び外部評価結果を報告。

2月 オープンスクールⅲ及び学校関係者評価会議Ⅲを実施する。外部評価結果とともに、次年度に向けて課題を検討し、学校評価書を作成。学校評価報告書をホームページで発信する。教育反省と併せて全職員で次年度の課題を認識し、本校の学校評価における次期中期目標を作成する。

6) 成果と課題

学校自己評価のスリム化による成果として、事務処理負担の少ないシステム化が図られてきている点が挙げられる。また、職種区分による取組により、全職員が参加して学校評価が実施されることになり、無効評価が減った点も、改革の成果と考えられる。

学校評価の結果として示された低評価項目については、関係する校務分掌組織が検討し、年度末教育反省に改善案の提案が行われるため、次年度すぐに取り組める流れへとつながるようになってきた。また、学校組織を改善するというと、低評価項目から次期の目標を策定するという考え方はなく、高評価項目から更に学校の特色を出していくためのレベルアップを図っていくべき項目を取り上げていく考え方へと変化している。

課題点としては、外部評価とのすりあわせが必要である点が挙げられる。また、その分析をどうするかも検討課題である。学校自己評価、外部評価、学校関係者評価の関連性を明確にして、総合的な評価に結び付けていくことも重要で課題となっている。

7) 垂水養護学校の学校評価に対する考察

垂水養護学校の学校評価の特徴は、学校評価の取組を推進する中で、当初は校内の部署の教員が総花的に評価項目にチェックする作業を中心としていたが、重点化した目標を重視する流れに転換することができた点にある。学校評価の目的を重点的な目標を達成するための情報とすることに置き、各部署での評価を行う際、その目標達成に近付けるために必要なことを議論する場とした。その結果、学校で行われる活動の中でうまくいっていない部分を探し出し、その部分をより良い状態に引き上げることよりも、良い点に注目し、学校の特徴を更に伸ばしていこうとする機運に結び付けている。

また、中間評価の重視も特徴的である。中間評価での結果を基に各部署で改善案を検討し、後期でその改善案を実施することができるようになっている。次年度には、改善案を実施した結果を引き継ぐこととなるため、新年度に入って学校の体制が新しくなった後も評価結果を引き継ぐことができる。また、教員が実際の改善を経験でき、さらに改善点を念頭に置いて次年度に進むことができる利点がある。他の学校の例では、新年度に入って学校が新体制になると、前年度の結果が引き継がれない状況が生じている場合があった。その場合、教員は実際の改善経験をしないまま年度が改まり、新体制で再度改善案を検討することになっていた。したがって、多くの学校で、中間評価を重視する取組は参考になるものとする。

また、教育委員会等とのやり取りをする際に、中間評価の結果をもとに交渉し、次年度へ向けて、学校と教育委員会が協力した取組を実施できるメリットもある。

垂水養護学校の学校評価は、以上のような点に特徴があり、総括すると、目的を達成するための仕組みとして、学校評価の活動を活用している点に学ぶべきところが多い。

参考1：平成18年度 神戸市立垂水養護学校 外部評価書（総括）

1. 外部評価委員会の総評

① 目標と重点的な教育活動

○垂水養護学校が「個別の指導計画の充実」「学習指導の充実」「特別支援教育センター校として地域の学校に対する支援の充実」の3つの柱を中心に、具体的な教育活動を進めていった点を評価したい。垂水養護学校の素晴らしいところは多く、専門的なからだの学習としての「自立活動」、重度・重複化への対応、医療的ケア研修体制・子どもの特性に応じた教材づくり、授業作り・センター的役割へ向けた職員の校内研修体制、療育訓練講座など、外から見ていても、本校の特色がよく表れていたと思う。

② 取組状況

○今年度は、学校評価システム構築事業を受けて、昨年度までの評価項目の精選、重点化が図られていた。自己評価書にも学校の特色や目標など、小・中・高等学校とは違う「肢体不自由養護学校」としての工夫が見られる。次年度も、3つの柱を中心にした分かりやすい評価システムへの改善、充実へ向けてのより一層の努力を期待したい。

③ 成果

○PTAと連携を図り、保護者アンケートを実施されたことの意義を大いに評価したい。今後は、今回のアンケートでの設備面の充実等に関する低評価項目に関する改善方策や、少数意見の生かし方等を工夫していただくことを通して、評価システムとして定着させていただきたい。

○今年度、外部評価を取り入れるなどの評価システムの再構築を進めていく中で、教職員の意識改革が図られていったことが一番の成果である。オープンスクール時の授業を参観していても、教職員の日々の努力の様子がうかがわれ、そのことが子どもたちにとっても良い効果として表れていることも事実である。それが、PTA保護者アンケートの「子どもは、毎日学校へ行くことを楽しみにしていますか。」という設問への肯定的評価の高さとなって表れていたと思う。

④ 課題

○養護学校は、幼稚部を入れて高等部まで12年+aの年代の広がりのある保護者がいる。教育課程の各部へ段階的に移行する系統性も大切だが、保護者のこの12年+aの中で、子どもと共に育っていくことも大切だと考える。アンケートを基にして、保護者同士が共に勉強し合う、「保護者が保護者を育てる、育ち合う」ことを大切に活動し、今後もPTAとの連携のもとに進めていただきたい。

○PTAアンケートの保護者への返し方は難しい部分もあるが、少数意見をも大切にしながら双方向に継続していくことで、信頼度・満足度が上がると考えられる。

こうした繰り返し、新たな評価文化を育てることにつながるはずである。

⑤ 改善してほしい点

○学校全体としての取組は大いに評価している。養護学校に在籍している子どもたちは、地域の学校に比べると、教職員とのかかわりが密であり、その影響力は大きい。生徒は教職員を選ぶことはできないという事実を踏まえ、日々の研鑽により一層努めていただきたい。ベテランの教職員を核とした研修体制の充実を期待したい。保護者もまた、学校や教職員にだけ問題を課すのではなく、互いにコミュニケーションを取り合うことで、同じように努力していく必要性を感じている。

○養護学校は他校種と違い、学年生徒数が少なく、評価結果についての具体的な聞き取りが十分できる利点がある。良い点、悪い点、改善点などについて具体的に聞き取る中で、保護者、生徒と教員、学校のコミュニケーションの絆を深め、共に協力し合う学校づくりを進めていっていただきたい。

参考2：平成18年度 神戸市立垂水養護学校の外部評価結果について（分野別）

学校の外部評価結果と今後の課題

(1) 教育課程・学習指導

- ・児童生徒の状況が大きく異なることから、多様な準備が必要となる。その際、他の子どもが学習している様子を見ることができると、自己の学習の意欲喚起につながる場合があるので、そういう機会を設けてほしい。
- ・保護者にとっても、一番興味・関心のあるのは先生方の実践力である。集団を組んでの指導場面が多いだけに、本校のように効果的な相談場面を設定し、経験のある教員が核となって経験の浅い教員を指導することで、ダイナミックな学級経営ができれば理想的である。

(2) 進路指導

- ・児童生徒の状況に応じて、適切な進路先が開拓されている。今後は、進路先での卒業生の状況をフィードバックして、後に続く者への資料提供がなされることを望む。
- ・実施状況にも記載されているとおり、高等部での目の前の進路指導だけでなく、キャリア教育の視点から、小学部からどう生きていくかの視点を大切にされた系統的な指導が課題になる。教育課程全体の中で編成する必要がある。

(3) 安全管理

- ・廊下に物品がなく、児童生徒の通行が安全になるよう工夫されている。また、緊急時の搬送にも支障がない。紫外線カットのフィルムは、耐用年数を超えると効果がなくなる。定期的に紫外線測定器(CASIO UV.CHECKER UC-120・廉価。)で測定をする必要がある。緊急時（フィルムの破損等）には、スプレー式の物を常備しておくといよい（UVガード100）。また、児童生徒が不在の時は、窓を全開にして紫外線を十分に室内に入れて、換気・殺菌をしておくといよい。
- ・ヒヤリ・ハット報告書を作成し、大きな事故につながる前に対応策を講じて行くことが大切。職員間での配慮と共通理解が必要である。
- ・安全と安心は違う。安全面に配慮して教育活動が行われているが、保護者等、違った立場から見ると不安に思う面もある。お互いにコミュニケーションをとりながら進めていけたらと思う。

(4) 保健管理

- ・児童生徒の保健管理は、従前より工夫されている。教職員も含めて、外部からの人による感染等への対応が必要である。
- ・学校では病院並みというわけにはいかないが、どのレベルで衛生管理をするか、関係各方面から支援を得て決める必要がある。教職員が、感染などの仲介者にならない体制を、常に確認することが必要である。

(5) 特別支援教育

- ・地域のセンター的な役割を果たすためには、具体例を示した発表（PR）の機会と、相談すればどれだけ効果があるかということをアピールする必要がある。窓口を広くとると、想定した問題事例が来る。窓口を想定事例の枠に狭めると、誰も相談に来ない。対応できない問題があれば、相談先を紹介すればよい。
- ・特別支援教育のセンター校として、今後特に地域校の軽度発達障害児への支援体制をどう構築していくかについての推進計画の作成が必要であろう。さらに、コーディネーターの継続的な育成計画がしっかりしていると、異動等でメンバーの入れ替えがあっても、継続的な体制維持ができる。

(6) 組織運営

- ・教職員間の意思疎通は、相当十分になされているように見受けられる。大人数のため、全体の意思統一が困難な場合があると推測されるが、管理職の姿勢が浸透しており、積極的な組織活動がなされている。具体的には、校長の強いリーダーシップと教頭の柔軟なフォローの姿勢がうかがわれる。

(7) 研修

- ・障害の特性に応じた研修は、すでに計画的に行われている。これに加えて、他の障害に関する研修も必要となる。
- ・各教員が、いかに具体的な課題意識をもって研修に参加するかがポイント。何年かを見通し、年次を追ってスキルアップできる、体系的な研修ができれば効率的である。
- ・オープンスクールのような地域との連携行事については、地域の児童生徒や学校へのサポーター作りという観点や、住みよい街作りという観点からも大切である。
- ・本校は他の地域の養護学校に比べて市街地にあり、この立地状況は、人との出会いの場を工夫するには条件がよい。子ども同士の出会いの場を工夫されていることは、双方の子どもにとっても教育的意義が大きい。保護者間の連携推進については、PTA 活動等を通じて、更にもその機会を増やされることを望む。

(8) 施設・設備

- ・職員室が1階にないことの問題点を考慮した活動が、工夫されている。それでも、外部からの侵入に対しては、何らかの配慮が必要であろう。廊下の照度は十分であろうか。特に予定の不安定な子どもにとって、廊下での物の見え方（展示物の位置・採光の状態）に、照明の不全はないであろうか。

(9) その他

- ・組織は人によって活性化する。人事については、長期間にわたって一貫した方針でなされるように、市教委（教職員課・人事）と校長会・養護学校間の連携が必要である。教員として自分の実力を発揮し、子どもの成長に役立つ実践をする者を積極的に登用し、場合によっては勤務に関する厳しい評価によって考え方を是正しつつ、継続的に取り組む必要がある。
- ・評価の回答の割合をどうとらえるか、つまり、1件でも【否】があった場合、評価項目によっては、その具体事例を取り上げて確認→修正・是正が必要である。評価の割合だけで評価活動を完了してはならない。
- ・とりあえずは、子どもが学校生活が楽しいといってくれる体制づくりが必要。そのレベルに留まることなく、その後いかに子どもの興味・関心を高めつつ、指導目標を達成するかが教師の責務である。

(2) 東京都立調布特別支援学校の実践

「特別支援学校の学校評価における本人評価への取組を中心に」

1) 学校の概要

東京都立調布特別支援学校は、学区域を調布市、三鷹市、狛江市、府中市とする知的障害教育課程の特別支援学校である。昭和51年4月の開校時は、小学部7学級、中学部1学級、全児童生徒46名であったが、年々増加をたどり、今年度は小学部26学級、中学部16学級、全児童生徒185名となった。そのため、教室不足で、平成24年度には、東京都の特別支援教育推進計画により、一部学区域の分離が行われて、過密解消が図られる予定である。

教職員は、校長、副校長と4名の主幹教諭、12名の主任教諭を含む78名の教員と経営企画室部門を含めた82名の教職員が勤務している。今年度、学校課題として「地域との連携」「学校評価の教育活動への生かし方」を設定し、教育活動を推進している。

2) 調布特別支援学校の学校評価

(1) 2つのねらいと実施方法

調布特別支援学校では、学校評価のねらいとして、次の2つを掲げている。

- ①教育活動を充実していくための学校組織の機能について、総合的・客観的に反省・評価し、問題点と課題をまとめる。
- ②学校評価に基づき、次年度の教育計画を立てる。

上記のねらいのもと、教職員（個人・学部・分掌・委員会・教科会）評価、保護者評価、学校運営連絡協議委員評価、児童生徒の本人評価（本人アンケート、平成18年度より実施）、外部評価（平成21年度より実施）、地域評価（平成22年度より）を実施している。

(2) 学校評価にかかわる情報の提供の工夫

校長が発行する保護者向け学校だよりや教職員向けだよりを工夫し、アンケート等で得た、学校内の事業に対する評価を、タイムリーに提供している。

(3) 学校内の取組の集約機能としての学校評価

研究紀要に、その年度に取り組んだ研究活動や、各分掌での主な実践内容を記述し、報告し合い、教職員が学び合う機会とするとともに、それらの内容を外部に発表し、本校の実践について理解を促している。

(4) 評価項目の重点化

毎年評価項目を検討し、評価項目の重点化を目指している。今年度は、保護者向け設問と教職員向け設問の比較を行い、分析した。

(5) 学校評価の活用の工夫

学校評価の情報から組織の変革を促している。

- ・得られた情報から教職員の「気づき」を促す。
- ・教育を受ける「児童・生徒」からの評価に対応する。
- ・組織をよりよくしようとする取組につなげている。
- ・学校評価の結果をすぐできる対応策につなげ、実行力を高める。
- ・主幹教諭・主任教諭や担当教諭までのラインを確立し、教職員の学校経営計画のP lan作りへ

の参画意識を高める。

3) 本人評価の取組について（平成18年度～平成21年度）

調布特別支援学校では、児童生徒による本人アンケートを、「本人評価」と称している。この本人評価（児童生徒アンケート）に本格的に取り組み始めてから、数年しか経っていないが、毎年新たな課題が生じており、それに対する模索を続けながら、毎年少しずつ改善の努力をしてきている。以下に、平成18年度からの取組の概要を紹介する。

(1) 平成18年度の実施内容

<ねらい> 一人一人の、学校に対する思いを受け止める。

<対象> 一部の児童生徒で実施する。

<方法> 担任が聞き取る。

<内容> 6項目（給食・学校・勉強について）

(2) 平成19年度

<ねらい> 一人一人の、学校に対する思いを（指導者・環境・人権の3領域の観点から）受け止める。

<対象> 児童生徒全員（～今年度まで継続）

<方法> 担任や質問に関する授業者以外の教職員が聞き取る。

<内容> 3領域（指導者・環境・人権）について全14項目。

(3) 平成20年度

<ねらい> 一人一人の評価を受け止めて、学校評価に生かす。

<方法> 担任や質問に関する授業者以外の教職員が聞き取る。

<内容> 3領域（指導者・環境・人権）各3項目で全9項目。回答に「はい」「いいえ」の他に、「わからない（無回答）」を設ける。（～今年度まで継続）

(4) 平成21年度

<ねらい>

①一人一人の評価を受け止めて、学校経営に生かす。

②児童・生徒が自分の意見や気持ちを伝える機会とする。

③児童・生徒の自分の意見や気持ちを教師が聞き取ったり、受け止めたりする機会とする。（～今年度まで継続）

<方法> 担任や質問に関する授業者以外の教職員が聞き取る。小学部6年、中学部3年生については外部者が聞き取る。（～今年度まで継続）

4) 平成21年度の本人評価の結果

平成21年度に実施した本人評価の結果は、図3-1に示したとおりである。

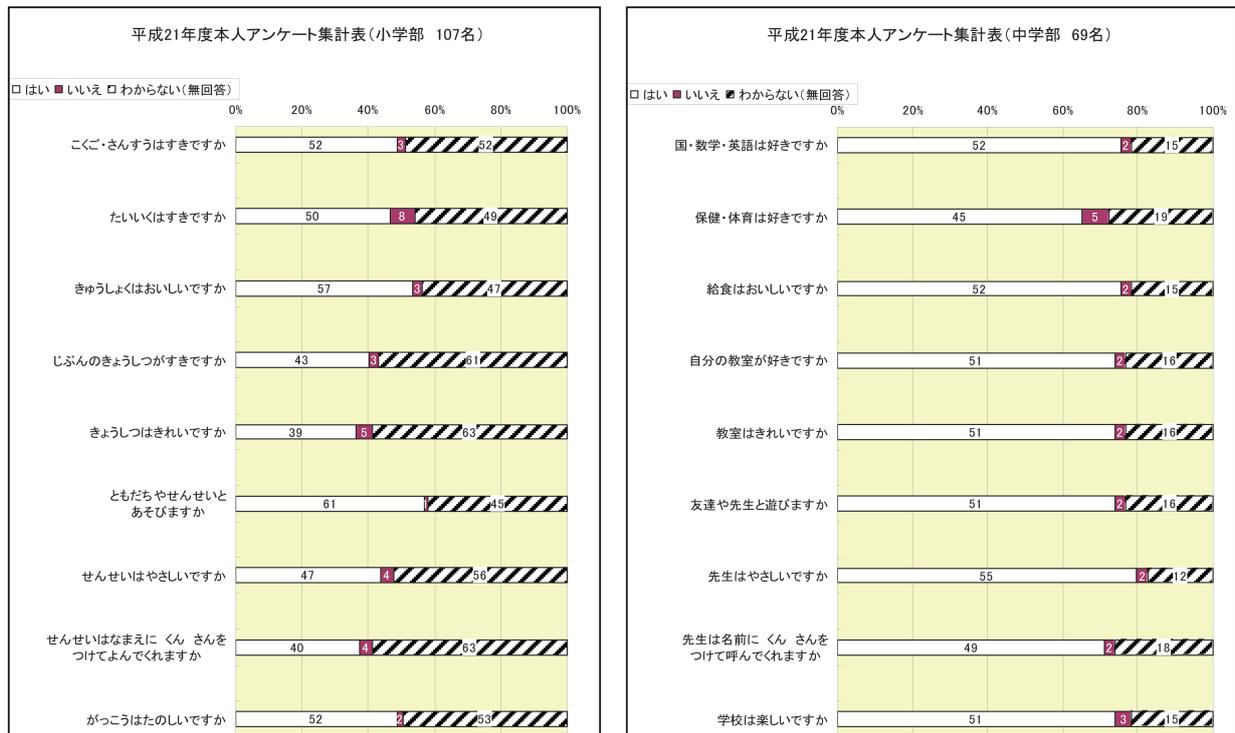


図3-1 平成21年度の本人評価の結果

<本人評価実施に関する学校運営連絡協議会協議委員会での意見>

学校運営連絡協議会協議委員会（学校評議員会）で、平成21年度の本人評価については、次のような意見があった。

- ・本人評価の全児童生徒への実施は、調布特別支援学校独自の取組である。
- ・教育活動や教師に関してことばや態度で十分に表現できない場合や、教師が十分に理解できないことなど、評価に困難が伴うことは、学校運営連絡協議会委員自身が本人評価を実施したことにより、十分理解できた。本人が評価できない項目については、保護者と担任教員が説明文書を添付するなどして、評価に代えることなどが必要となろう。

また、教員のアンケートにおいても、本人評価の実施に対して、次のような意見があった。

- ・学校運営連絡協議会協議委員の協力をいただいたのはよかった。
- ・好き嫌いを示す手段（カードなど）を学習時に扱い、本人評価に活かしてみてもどうか。

5) 22年度の取組

平成22年度については、聞き取り方について工夫した。本人評価のねらいと方法は、21年度と同様で実施した。

<ねらい>

- ①一人一人の評価を受け止めて、学校経営に生かす。
- ②児童生徒が自分の意見や気持ちを伝える機会とする。
- ③児童生徒の自分の意見や気持ちを教師が聞き取ったり、受け止めたりする機会とする（～今年

度まで継続)。

<方 法>

担任や質問に関する授業者以外の教職員が聞き取る。小学部6年生、中学部3年生については、外部者が聞き取る（～今年度まで継続）。

平成22年度については、聞き取り方の工夫として、「すき」「きれい」「わからない」のカード、「きれい」「きたない」の写真カードを用意し、言語的なコミュニケーションが困難な児童生徒に対して使用してみた。

カードがやりとりの媒介になることで、ねらいの②③には、より近付くことができたようで、「きれいだと思われる教室のことを何回聞いてもきたないと言う」「きれい好きだからか、きたなく感じるのか」「机が乱れている教室の写真を、わざと指差してこちらの様子を見ている」等の話が聞けるようになった。

しかし、個々の児童生徒の実践に応じた聞き取り方法、聞き取り者を担任以外とした場合の聞き取り内容をいかに今後の指導に生かせるようにしていく等、課題はある。今後も、質問内容にある「指導者」・「環境」・「人権」を常に意識しながら、教育活動を計画・実施することの重要性を、この本人評価によって確認しながら、改善に努めていく予定である。



図3-2 本人評価で用いた「すき」「わからない」「きれい」の意思表示カード

6) 調布特別支援学校の学校評価に対する考察

特別支援学校における児童生徒による本人アンケートの実施方法については、各特別支援学校が工夫している状況にある。調布特別支援学校については、特に知的障害のある児童生徒が回答しやすい質問項目を工夫したり、言語による聞き取りだけでなく、絵カードを利用するなどの回答方法についても配慮したりして、すべての在籍児童生徒に本人アンケートを実施しているところに特筆すべき点がある。

東京学芸大学渡辺研究室の調査によると、東京都の特別支援学校における児童生徒による本人アンケートについては、障害種別や学部によって様々であることが報告されている。視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・病弱特別支援学校のように、小・中・高等学校の教育課程に準じた教育課程で

教育を行っている学校と、知的障害特別支援学校の教育課程による教育を行っている学校では、対応が大きく異なっていた。また、同調査によると、本人アンケートでは、「授業について」に関する質問項目数が一番多く、「授業が楽しいか」「授業は分かりやすいか」「どんな授業をしてみたいか」などの視点により、児童生徒からの評価を重視していることも明らかにされている。次いで、「先生」に関する質問項目が多く、児童生徒からの評価を重視していることがうかがえ、「先生はあなたの話を聞いてくれますか」や「先生は悩みや話を聞いてくれますか」等の質問項目を設定することにより、教師との信頼関係に関する児童生徒からの評価を得ている学校があったということであった。また、「先生はわかりやすく話していますか」や「先生の教え方はわかりやすいですか」等の質問項目を設定して、教師の指導力について、児童生徒からの評価を得ている学校もあったことが報告されている。

特別支援学校では、表現が苦手であったり、自分の意思を言葉で表すことが困難であったりする児童生徒も少なくない。しかしながら、人権を尊重する観点からすべての在籍児童生徒を対象とした本人アンケートの実現を目指すことは、特別支援学校としての責務であると言える。したがって、児童生徒の発達段階や障害の状態等に応じ、学校生活全体を通じて、様々な評価項目を設定したり、自由記述させたり、また、回答方法を工夫したりするなどして、児童生徒の気持ちをくみ取っていくことは、大きな課題だと言える。

こうした諸点から、調布特別支援学校において、全児童生徒を対象とした本人アンケート実施の方針が打ち出され、言語によるコミュニケーションが困難な児童生徒についても、本人の気持ちが引き出せるよう、様々な配慮をしていることは高く評価される。回答の方法についても、前年度までは、いくつかの比較的簡単な質問で、回答は「はい」「いいえ」の選択で意思表示できるよう取り組んでいたが、本年度は更に工夫を重ねて、絵カードや写真カードを使って、より児童生徒が意思表示しやすいような配慮がなされている。先進的な取組として評価でき、今後の展開が期待される。

特別支援学校の中には、学校生活の様々な場面における状況や教員の対応などについて、具体的な場面を想定し、困っていたり、悩んでいたりはしないかという視点から、児童生徒に評価をさせている学校もあり、今後、更に児童生徒の実態に即した質問項目の工夫を図り、どの特別支援学校においても、全児童生徒を対象とした学校評価が実施できることが望まれる。

参考：平成 22 年度 東京都立調布特別支援学校 学校経営計画

本計画は、「教育委員会の教育目標」、「基本方針」、東京都における教育振興基本計画として位置づけた「東京都教育ビジョン（第 2 次）」及び「東京都特別支援教育推進計画第 2 次実施計画」等、東京都教育委員会が掲げる主要施策に基づき、今年度本校として取り組む事項について示したものである。

I 目指す学校

人権尊重の精神を重んじ、地域から学び、地域と生きる開かれた学校として、都民に信頼される学校を目指す。

1 教職員の公務員としての意識を高め、学校運営を改善し続ける学校

2 児童・生徒が楽しく、元気に、安全に学習できる学校

3 児童・生徒一人一人のニーズに応じた適切な指導と支援を行う学校

4 家庭教育支援を充実させる学校

5 地域の特別支援教育センター校としての役割を果たす学校

6 地域とともに歩み、地域に協力する開かれた学校

II 中期的目標と方策

1 人権を尊重する教育の推進

(1) 児童・生徒の気持ち・意思を受けとめる教育の推進

(2) 一人一人の障害特性を理解した教育の推進

(3) 教職員の人権に対する意識を高める研修の推進

2 教育活動の充実

(1) 新学習指導要領に基づく教育課程の適正な編成・実施・管理・評価

(2) 障害特性に応じた指導内容の充実と学習環境の整備

(3) 安全で安心して学習や生活を送るための生活指導の充実

(4) キャリア教育の充実

(5) 健康教育の推進

(6) ICT教育の充実

(7) 外部人材の積極的活用

3 教職員の専門性の向上

(1) 一人一人の授業力向上に向けた授業改善と評価の充実

(2) 発達段階や障害の特性を考慮した教材・教具の開発とデータベース化

(3) 校内研究会や研修会の充実による O J T の推進

(4) 外部専門家や教職員研修センター等の積極的活用

4 特別支援教育のセンター的機能の充実

(1) 幼・小・中・高等学校への支援機能の充実

(2) 特別支援教育に関する相談・情報提供機能の充実

(3) 教育・医療・福祉・労働等関係機関との連絡調整機能の充実

(4) 幼稚園・保育所、小・中・高等学校等の教職員に対する研修協力機能の充実

(5) 地域の障害のある児童・生徒への施設・設備提供機能の充実

5 学校経営の適正化・効率化

- (1) 法令等に基づくサービスの厳正の徹底
- (2) 西部学校経営支援センターとの連携による適正な業務の遂行
- (3) ICT計画の推進と情報管理システムの再構築
- (4) 会議・業務等の効率化や組織の精選の推進
- (5) 経営企画室等の経営参画の充実

6 危機管理体制の整備

- (1) 東京都学校危機管理マニュアル及び調布市防災協定に基づく防災体制の整備
- (2) 情報セキュリティ体制の整備
- (3) 健康危機管理対策の充実

7 平成24年度府中地区特別支援学校（仮称）開校に伴う業務の推進

- (1) 実施設計検討委員会への参画や関連する4校との連携の推進
- (2) 保護者や地域、関係機関等に対する理解の推進
- (3) 校内体制の整備

Ⅲ 今年度の取組目標と方策

1 教育活動の目標と方策

- (1) 学習指導、(2) 生活指導、(3) 進路指導、(4) 特別活動、(5) 健康対策、(6) 安全対策、(7) 広報活動、(8) 地域交流等、(9) 学校経営・組織体制、の観点において設定する。
- (1) 児童生徒一人一人の発達段階や障害の状態に応じた適切な指導の徹底
 - ① 自閉症教育課程の実施・評価
 - ② 保護者とともに作成する個別指導計画および個別の教育支援計画に基づく指導
 - ③ 外部専門家やアセスメント等を活用した実態把握、指導方法・内容の検証
 - ④ 障害の特性に対応した指導と教室や施設等の環境の調整
 - ⑤ ICT機器を活用した授業の推進
- (2) 保護者や地域の関係者との連携による生活指導及び生活支援の充実
 - ① 保護者との連携による通学指導の徹底、一人通学の推進
 - ② スクールバスの安全な運行計画の推進
 - ③ 心理的ケアが必要な児童・生徒への指導・支援の共有
 - ④ 地域関係機関との連携による支援会議や放課後活動等連絡会の実施
- (3) 学校教育卒業後の社会自立・職業自立の基盤づくりを目指した進路指導の充実
 - ① 府中朝日特別支援学校や地域関係機関などとの連携による将来を見据えたキャリア教育の実施
 - ② 保護者への進路情報の提供及び進路研修会の実施
- (4) 集団活動を通じた指導内容の充実
 - ① 学級での活動を通じた所属意識やよりよい人間関係の形成
 - ② 学校行事における体験活動を通じた公共の精神や自主的な態度の育成
- (5) 心身の健康の保持増進に向けた教育活動の充実
 - ① 外部専門家による歯磨き指導、摂食指導、療育相談の充実

- ② 学校給食の安全な提供と食育の推進
- (6) 危機管理体制の整備、安全指導の徹底とけが・事故等の未然防止
 - ① 実際的な緊急時対応訓練（自衛消防訓練、セーフティ教室、救急救命講習会、不審者対応訓練、防災訓練、帰宅支援ステーション対応訓練等）の実施
 - ② 緊急連絡システム（フェアキャスト）運営管理
 - ③ 交通安全指導や校外歩行における安全指導の徹底
- (7) 情報の発信と地域及び関係機関との連携
 - ① ホームページ等を活用した広報活動の推進
 - ② 学校公開等の実施による本校への理解充実
 - ③ P T A サポーター制度の活用と定着
 - ④ 電気通信大学との連携による学習活動への支援体制の整備
- (8) 地域のニーズに対応した特別支援教育のセンター的機能の発揮
 - ① 4市との合同研修会の実施
 - ② エリアネットワーク連絡会（9校連絡会）の実施
 - ③ 地域の学校及び関係機関への支援の推進
 - ④ 交流教育及び共同学習・副籍事業を通じた理解教育の推進
 - ⑤ 早期教育相談（「なごみカフェ」）の充実
- (9) 教職員の服務と経営の透明性の確保及び学校運営・経営への校内支援体制の充実
 - ① 法令等に基づく服務の厳正の徹底のための研修会の実施
 - ② 教育計画進行管理表による外部評価（児童・生徒本人評価、保護者・地域評価）の実施と公表
 - ③ 個人情報 の適正な管理の徹底
 - ④ T A I M S 配備への対応と活用のための研修会の充実
 - ⑤ 経営企画室等による教育活動の側面的援助
 - ⑥ 主幹教諭、主任教諭を中心とした組織運営

2 重点目標と方策（推進部署）

- (1) 教育活動の充実
 - ① 自閉症教育課程の実施と内容の検証（教務教育課程部）（研修会年2回）
 - ② ボランティア等地域資源を教育活動に活用する校内体制整備、ネットワーク作りの推進（教務庶務部、リソース・ネット）
 - ③ 全校行事（学習発表会、全校集会、各儀式）の円滑な運営（教務全校行事部）
 - ④ 保護者のニーズに応じた支援会議の実施（校内支援部）（対象者各1回）
 - ⑤ 将来を見据えたキャリア教育全体計画の検討（進路教育相談部）（12月までに作成）
 - ⑥ スクールバスの安全な運行に向けた安全管理及びマニュアルの見直し（生活指導部）（安全連絡会月1回、スクールバス保護者会年2回、講習会年1回）
 - ⑦ 一人（親子）通学の推進（生活指導部）（一人（親子）通学保護者会年2回実施、文集の発行年1回）
 - ⑧ 一人一人に応じた健康づくりの推進（保健給食部）（歯磨き指導年3回、食べ方相談年2回、整形外科診察年2回、摂食研修会年1回、療育相談11回）
 - ⑨ 食育の推進（栄養教諭、保健給食部）

- ⑩ キャリア教育研修（進路教育相談部）（年3回）
- (2) 教職員の専門性の向上
 - ① コミュニケーションに関する指導の研究（研究部）（全体会3回、分科会5回）
 - ② 外部専門家による研修の実施とその成果を活用した指導の充実（研究部）（研修会年2回）
 - ③ 教材・教具のデータベース化（研究部）（年2回整備）
 - ④ ケースカンファレンスの実施（研究部）（年6回）
 - ⑤ 研究実践報告会の実施（研究部、地域支援部）（2／16に実施）
 - ⑥ 教職員研修センター主催選択課題研修等への参加（研究部）（15名以上）
 - ⑦ 若手教員育成研修における授業研究の実施（研究部）（対象者各3回）
 - ⑧ ICT機器の活用に向けた研修会の実施（情報教育部）（年2回実施）
- (3) 特別支援教育のセンター校としての機能の充実
 - ① 教育相談及び早期教育相談の実施（特別支援教育コーディネーター、地域支援部）（年間100件）
 - ② エリアネットワーク連絡会（9校）の開催（特別支援教育コーディネーター、地域支援部）（年3回）
 - ③ 学校公開、学校見学、体験入学の実施（進路教育相談部、特別支援教育コーディネーター）（学校公開年2回延べ150人、学校見学延べ30件、体験入学延べ40件）
 - ④ 地域指定校との副籍交流の実施（地域支援部、特別支援教育コーディネーター、担任）（延べ70回）
 - ⑤ 放課後活動連絡会の実施（年1回10団体参加）
 - ⑥ 学校開放事業（公開講座、開放プール）の実施（地域支援部）（2講座各5回、5日間延べ100人）
 - ⑦ 小・中学校への巡回相談（特別支援教育コーディネーター）（年10回）
 - ⑧ 研修会等への本校教員の講師派遣（年8回）
- (4) 学校経営の適正化・効率化及び危機管理体制の充実
 - ① 学校運営連絡協議会の開催と外部評価の実施（学校運営連絡協議会事務局）（年3回）
 - ② 服務事故防止研修の実施（年3回）（服務事故0件）
 - ③ 予算計画に基づく適正な予算の執行（経営企画室）（執行率100%）
 - ④ T A I M S 端末の有効活用（情報教育部、経営企画室）（T A I M S 取り扱い研修2回実施）
 - ⑤ 個人情報の適正な管理の徹底、ルールの見直し（情報教育部）（7月までに）
 - ⑥ 学校危機管理計画の策定（防災部、危機管理委員会）（12月までに）
- (5) 安全で快適な環境づくり
 - ① けが・事故等への迅速で丁寧な対応、未然防止及び再発防止（保健室、生活指導部、施設委員会）（ヒヤリハット掌握月1回、安全ケース会年1回）
 - ② 施設・設備等の点検・改修や校内美化の推進（生活指導部、施設委員会）（安全点検及び施設委員会月1回実施）
 - ③ 感染症に対する予防及び適切な対応の推進（保健室、保健給食部）（職朝等での周知、時期に応じて）
 - ④ 健康で安全な職場環境づくり（安全衛生委員会、施設委員会）（月1回安全衛生委員会実施）
- (6) 平成24年度府中地区特別支援学校（仮称）開校への移行
 - ① 実施設計検討委員会への参加（年3回）
 - ② 保護者説明会の実施（年2回）
 - ③ 校内業務の改善、校内体制の見直し（主幹教諭、主任教諭）（12月までに）

3. 特別支援学校の特性を反映した特色ある学校評価シートの検証と提言

(1) 自己評価における目標の設定と評価項目の設定の重要性

学校が、教育活動その他の学校運営について、目標（Plan）－実行（Do）－評価（Check）－改善（Action）というP-D-C-Aサイクルに基づき継続的に改善していくためには、まず目標を適切に設定することが重要であることはいうまでもない。

自己評価における目標については、学校教育目標や校長をはじめとする教職員の目指す理想、学校の置かれている実情等を踏まえて、中期的な学校経営の方針を策定し、さらに、この中期的な方針を敷衍して、重点的（あるいは段階的）に取り組むことが必要な、単年度などの短期的（場合によっては中期的）な目標や教育計画を、具体的かつ明確に定めるという基本的な方向性が、学校評価ガイドラインに示されている。

その際、重点として設定する目標等については、学校の全教職員がそれを意識して取り組むことができるようにするなど、実効性あるものとなるように、学校運営の全分野を網羅して総花的に設定するのではなく、学校が伸ばそうとする特色や解決を目指す課題に応じて精選するということも、重視されている。

各学校における自己評価の評価項目の設定に当たっては、こうした自己評価における目標に基づいて、短期的（場合によっては中期的）な重点目標等の達成に向けた具体的な取組などを評価項目として設定することになる。また、評価項目の達成状況や達成に向けた取組の状況を把握するために必要な指標を設定したり、必要に応じて、指標の達成状況等を把握・評価するための基準を設定したりすることも重要である。

評価項目の設定については、学校評価ガイドラインでは、以下のようなことも示されている。

- ・評価項目・指標等の設定に当たっては、設定した重点目標等の達成に即した具体的かつ明確なものとし、教職員が意識的に取り組むことが可能な程度に精選する。
- ・重点目標や評価項目・指標等の設定に当たって、学校関係者評価の評価者や一般の保護者等が理解できるように、必要以上に網羅的になったり、詳細かつ高度に専門的な内容となったりしないよう留意する。
- ・具体的にどのような評価項目・指標等を設定するかは、各学校が判断すべきことである。各学校は、その設定した重点目標等に照らして適宜評価項目を選択し、あるいは、それぞれの特色や課題に応じて新たに設定するなどして、必要な評価項目・指標等を設定することが重要である。また、設置者が、地域の実情等に応じ、設置する学校で共通して取り上げるべき評価項目・指標等を設定することも考えられる。

上記の記述は、小・中学校を対象としたものであるが、特別支援学校にも共通するものである。しかしながら、特別支援学校の特性という観点からすると、学校評価ガイドラインに示されている参考資料は、今後、更に実践が積み重ねられる中で、整備されてくるものと思われる。

そこで、実際に各特別支援学校では、学校評価シートに特別支援学校の特性に関する項目をどのように反映させているかを探ることにした。

(2) 学校評価シートへの特別支援学校の特性の反映状況

平成20年度に本研究所が実施した学校評価に関する全国調査においては、実際に各学校で用い

ている自己評価用のシートの提供も求めた。回答があった737校のうちの665校から、学校評価用シートの提供を受けることができた。

各学校から提供を受けた学校評価用シートについては、特別支援学校の特性への対応状況を評価項目から把握するために、特別支援学校の特性に関連すると思われる項目の記載状況を、以下のような方法で検討した。

1) 方法

全国の特別支援学校から提供を受けた平成20年度版の「自己評価シート」の記載項目について、その内容から5つの分野に整理して分類・整理した。

5つの整理分野は、学校評価ガイドラインなどの記述から、次のようにした。

- 1 学部間の連携について
- 2 一人一人に応じた指導への対応
- 3 様々な障害に応じた専門性の向上
- 4 センターの機能への対応
- 5 関係機関とのネットワーク形成への取組

2) 結果

(a) 学校評価シートへの特別支援学校の特性の反映

学校評価シートへの特別支援学校の特性の反映状況の結果は、図3-3に示したとおりであった。「学部間の連携について」は、169校で評価の対象としていた。学校評価シート提供校の25.4%にとどまっていたことになる。

「幼児児童生徒一人一人に応じた指導への対応」については、「個別の指導計画」や「個別の教育支援計画」もこの中に含まれるが、464校の自己評価シートに反映されていた。これは学校評価シート提供校の69.8%に当たる。半数以上の学校で、評価に取り入れられていたということになる。

「様々な障害に応じた専門性の向上への取組」については、352校の自己評価シートに反映され

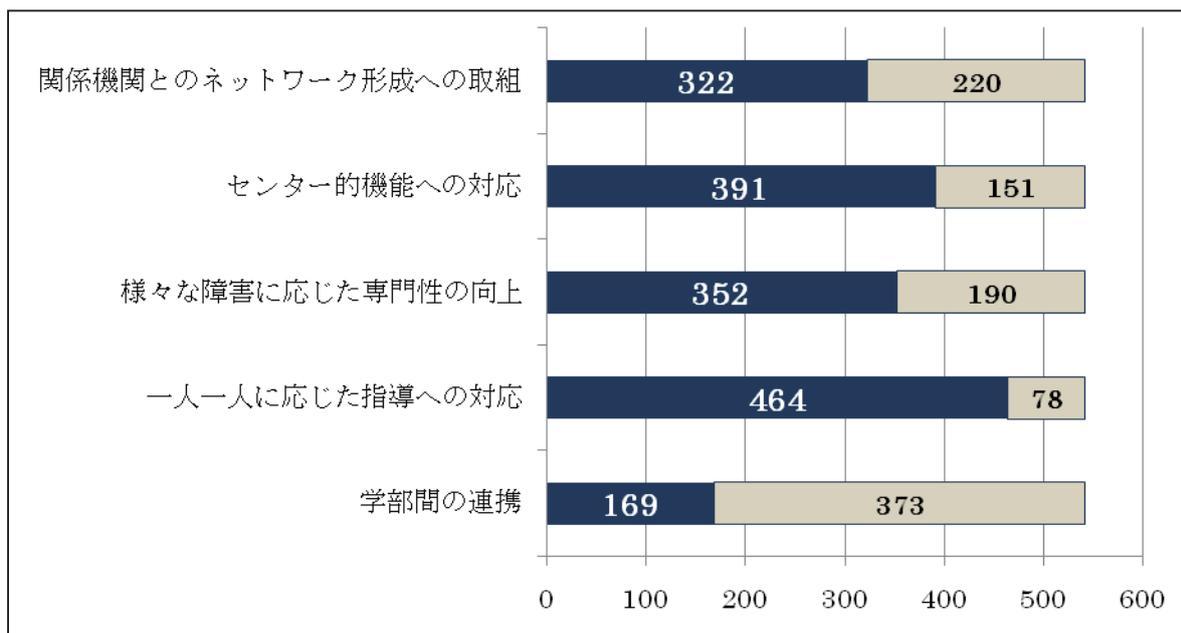


図3-3 学校評価シートへの特別支援学校の特性の反映

ていた。これは、学校評価シート提供校の 52.9%に当たる。

「地域におけるセンター的機能への対応」については、391 校の自己評価シートに反映されていた。これは、学校評価シート提供校の 58.7%に当たる。

「関係機関とのネットワーク形成への取組」については、322 校の自己評価シートに反映されていた。これは、学校評価シート提供校の 48.4%に当たる。

(b) 自己評価シートの記載法の特徴

自己評価シート記載のタイプは、大きく 2 パターンに分類できた。

一つは、評価目標あるいは具体的取組の内容を細部にわたって具体的に示しておいて、評定は達成段階別に簡略に示すパターンであり、もう一つは、評価目標あるいは具体的取組の内容を概括的に示しておいて、達成段階ごとに評価指標を具体的に詳細に示し、評定しようとするものである。他の項目との達成度の比較や経年的な変化を検証するなど、学校改善に活用するという点からは、明快に数値目標や段階が示せる前者のパターンの方が望ましいといえる。達成段階が簡便に示せないような場合にのみ、後者のパターンを利用するようにした方がよい。

いずれにしても、第一章で示したようにメタ評価の評価基準となる具体性、測定可能性、実現可能性、適切性の 4 点を入れ込み、シート全体の一貫性を考慮してシート作りをしていくことが望まれる。

3) 特別支援学校の特性を踏まえた特色ある評価シートを作成している学校の抽出と記載内容

665 校から学校評価自己評価シートの提供を受けたが、その様式は、各自治体で統一されたているものや、学校独自の書式のものなど、多様であった。

書式は、学校評価の組織や評価のプロセスに応じて、学校で活用しやすいものをそれぞれが判断すべきことであるが、特別支援学校の自己評価においては、特別支援学校の特性に関する評価項目や指標等を、明確に設定することが不可欠である。

こうした点から、上記の特別支援学校の特性にかかわる内容が、自己評価シートに反映されている学校の抽出を試みた。上記の内容が 3 つ以上シートに反映されている学校は、77 校であった。本項では、これらの学校を便宜的に特色ある評価シートを作成している学校とする。しかしながら、上記の内容を導き出せる項目が見いだせないシートの学校も多数あった。

さらにこの 77 校の特色ある自己評価シートの具体的な項目の記述内容を整理した。この評価項目の内容は、学校の目標、評価の方式等を考慮しないと、十分な解釈が困難なものもあるが、具体的な記述内容を示すことは、特別支援教育の特性の内容を具体的に理解し、各学校での評価シートへの反映を検討する上で、大いに参考になるものと思われる。

(a) 校内における学部間連携に関して

a. 学部間連携のポイント

特別支援学校は、小・中学校とは異なり、一つの学校に幼稚部から高等部までの複数の学部によって構成されている学校が圧倒的に多い。また、特別支援学校には寄宿舎を併設している学校も多い。特別支援教育体制では、一貫した支援体制の整備が大きな課題となっており、学部間の連携や寄宿舎と学校との連携の強化が強く求められている。こうした点から、「学部間の連携」は、特別支援

学校の特性として、学校評価においても積極的に取り上げて良い項目だと言える。

自己評価シートにおける「学部間の連携」に関する記載項目を抽出したところ、表3-1のように整理された。全国的に見ても、「学部間の連携」を自己評価項目に取り上げている学校は限定的であり、その中でも、学校改善に活用しやすい評価項目を設定している学校は、極めて限られていることが示唆された。

b. 抽出された評価の観点

具体的な学部連携の評価の観点には、次のようなものが挙げられる。

- ・学部を超えた「声かけ」や「見守り」等への対応がなされているか。
- ・他学部の参観が高められているか。
- ・他学部へ出向いての児童生徒間の交流などが実施されているか。
- ・学部間での引き継ぎが行われているか。
- ・他学部・学年との連携を密にして、個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成において各部門の連携が十分図られているか。
- ・小・中・高の縦のつながりを重視した教育活動が推進され、一貫性のある教育活動が展開されているか。

表3-1 学校部間連携に関する評価シートの記載例

目標及び具体的取組	評価指標・達成段階・評定
<ul style="list-style-type: none"> ・小・中・高の縦のつながりを重視した教育活動の推進：所属部に限らず、他学部の児童生徒に対しても声かけや見守り等を心掛ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登校時を中心に挨拶等をする。 A：意識して明るくしている。 B：している。 C：時々している。 D：していない。
<ul style="list-style-type: none"> ・学校・寄宿舎・保護者間の意思疎通と連携強化：学校と寄宿舎の連絡を密にし、生徒の支援に当たる。 ・全舎生の個別支援会議を持つ。 ・他学部参観への参加率を高める。 ・連絡帳の活用・教職員の寄宿舎行事への参加呼びかけ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別支援会議の開催率と他学部参観の出席率の結果 A：80%以上達成。 B：60%以上達成。 C：40%以上達成。 D：40%未満の達成。
<p>将来を見据えた進路への取組の充実：</p> <ul style="list-style-type: none"> ①参観日などにあわせて、小学部へは中学部の教員が出向くなどして、全学部で実習の説明会を実施する。 ②学部内及び学部間での引き継ぎを行い、連携を深める。 ③校内生活実習・現場実習の内容を、進路支援の視点で充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> A：十分当てはまる。 B：ほぼ当てはまる。 C：あまり当てはまらない。 D：当てはまらない。
<ul style="list-style-type: none"> ・小・中・高等部それぞれの役割を明確にし、各部門の連携を十分図り、学校全体としてまとまりを図ることができているか。 	<ul style="list-style-type: none"> A：そう思う。 B：ややそう思う。 C：あまりそう思わない。 D：思わない

<p>・一貫性のある支援体制の構築と児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育支援の推進：本校の教育目標・経営方針の下、学部・学年・学級、分掌部・係の具体的目標・方策などを明確にするとともに、他学部・学年との連携を密にし、新個別の指導計画、新個別の教育支援計画の作成・活用による小・中・高一貫性のある教育活動に努める。</p>	<p>空欄</p>
---	-----------

(b) 関係機関との連携に関して

a. 評価目標の内容分析

関係機関との連携では、単に「関係機関との連携ができたか」といった大項目の設定だけでは、次の改善に向けた具体的な改善目標が立てにくい。そうした観点から、より具体的な内容が示されている項目を選び出した。それでも、まだ多くの評価項目は、具体性に乏しいと言わざるを得ない。評価の対象とすることが大事な内容として、対象となる機関別に整理した。

学校間の連携についても、単に学校間交流を行う、居住地交流を行うだけでは、次の改善につながらない。その質のレベルや、量的なレベルが表せるような内容になっていることが望ましい。

b. 広く関係機関との連携の観点

①連絡の密度という観点から

- ・緊密な連絡・報告の態勢がどの程度できているか。
- ・関係機関とは誤解や行き違いのないように努めているか。
- ・支援会議の回数はどの程度か。

②情報収集の観点から

- ・関係機関との連携や、進路先の開拓などを通して、進路選択に必要な情報の収集ができているか。

③連携、開拓の中身の具現化

- ・自校の生徒や地域の幼児児童生徒への支援の充実を図るための連携になっているか。

④ネットワークの具現化

- ・関係諸機関の要請に応えた会議等への参加ができているか。

⑤関係機関との連携と校内での周知

- ・関係機関との連携に関する情報が、担任や自立活動担当者にも伝わっているか。

⑥情報の伝達

- ・関係機関との連携において、学校の情報が的確に伝わっているか。

⑦連携を踏まえた指導実践

- ・指導を行う際、外部の専門家との連携を図り、指導実践に活かしたか。
- ・外部専門家の指導や助言を、指導実践の充実に有効に機能させることができたか。

⑧個別の教育支援計画への活用

- ・個別の教育支援計画の策定に、関係機関との連携が活かされているか。

c. 対象となる機関別特性という観点から

①医療福祉機関との連携

- ・医療関係の専門家との連携を、指導実践に活かすことができたか。
- ・外部のST、PTの指導や助言を、実践の充実に有効に機能させることができたか。

- ・医療や福祉機関と連携し、個別の教育支援計画の策定を行ったか。
- ・児童生徒がかかわっている医療機関等との情報交換ができたか。
- ・新転入児童生徒について、担任や担当者等が関係機関を訪問して、情報交換ができたか。
- ・地域の福祉等関係機関等を訪問して、情報交換に努めているか。

②労働機関との連携

- ・ハローワーク主催の会議や進路にかかわる地域の会議等に参加し、進学及び就職や施設の情報を収集して、必要な情報については校内で周知されたか。
- ・ハローワークと連携を取りながら、進路活動を行っているか。
- ・地元の福祉行政担当部署と連絡を取りながら、福祉就労等に関する情報を収集し、整理して校内の関係者や保護者に伝達できたか。
- ・職業的自立に向けて、ハローワークや障害者就労連絡協議会等との連携を強化し、卒業後の自立と社会参加の支援に努めたか。

d. 地域の学校との連携

①交流及び共同学習の充実

- ・地域の小・中学校との「交流及び共同学習」の推進により、地域と共に学ぶ機会を大切にしているか。
- ・交流を通して、児童生徒間や職員間の親交が深まったか。
- ・両校で交流の目標が達成されたか。
- ・学校間交流、居住地校交流、地域交流の推進が、児童生徒の社会性の育成に役立ったか。
- ・学校間交流や居住地校交流、地域交流の推進により、交流校と連携しながら障害者理解や相互理解が図られたか。
- ・地域の学校や地域の人々とのとの連携を深め、交流及び共同学習を積極的に推進することにより、人とかかわる力や地域社会で生活する力を育てることができたか（社会性の育成）。
- ・交流及び共同学習の意義や活動方針を教職員が共通理解し、実施できたか（教員の理解）。
- ・在籍校の教育課程上の位置付けを明確にし、計画的・継続的な交流実践を行うことができたか（教育課程）。
- ・保護者が居住地校交流、共同学習の内容・方法等を理解し、交流及び共同学習の実施に満足しているか（保護者の満足度）。

②地域の小・中学校等のニーズへの対応

- ・小・中学校等のニーズを把握し、ニーズに応える支援体制を充実させることができたか。
- ・小・中学校等の要請に応じて、心理検査の実施や校内研修の講師派遣を行うなど、適切な学校支援ができたか。
- ・各小・中学校等の支援ニーズの把握に努めたか。

③地域の学校への発信

- ・学校の様子を地域や居住地の小・中学校などに発信したり、便り・手紙などの間接的な交流を継続的に実施したりしているか。
- ・近隣の保育所・幼稚園、学校の教職員及び保護者を対象とした講座を開催し、地域の研修センターとしての役割を果たしているか。
- ・学校間交流や学校周辺での地域交流、校外学習先での交流の様子について、保護者への情報提

供を行っているか。

e. 家庭・保護者との連携

- ・保護者や関係機関との連携を密にし、指導の効果を高めるために、家庭等との共通理解を図ることができているか。
- ・保護者に学校の教育活動の状況を具体的に伝え、保護者との共通理解が深まり、家庭への有効な支援が行われているか。

f. 情報発信

- ・学級だより等により、学校内の様子や児童生徒の学校生活の様子などに関する情報発信を通して、保護者との連携協力を努めることができているか。
- ・保護者への連絡を密に行い、学校行事等への保護者のより多い参加を得ているか。
- ・個別の教育支援計画、学校間や地域住民との計画的な交流の内容等を、保護者に具体的に伝えているか。

g. 地域住民との連携

①地域との連携の方策

- ・地域との共通理解を深めるため、連携強化と啓発に努めているか。
- ・地域に学校の教育活動の状況を、具体的に伝えているか。
- ・地域社会の自然・施設・人材等を活用し、地域住民との連携を図った活動を行っているか。
- ・地域住民を対象とする懇談会等を開催し、地域の関係機関との連携を図っているか。

②ボランティアとの連携

- ・ボランティア活動の目標や方針を設定し、教職員がそれらを共通理解しているか。
- ・ボランティア活動を実施するための体制・組織や役割分担が、明確になっているか。
- ・実態に即した奉仕体験活動やボランティア活動等を計画的に実施しているか。
- ・ボランティア活動普及事業等に登録し、ボランティアの活用に関して、社会福祉協議会との連携を図っているか。

③地域への学校公開・情報の公表

- ・学校主催による公開講座を実施しているか。
- ・ウェブ等を利用した情報発信を実施しているか。
- ・地域の様々な媒体を利用して、学校の教育活動についての情報を発信し、学校への理解を深めるとともに、学校行事等への参加を働きかけているか。

表3-2 関係機関との連携に関する評価シート項目の記載例

目標及び具体的取組	評価指標・達成段階・評定
<ul style="list-style-type: none"> 家庭、地域社会、関係機関の役割を明確にし、より一層の連携を図るとともに、それぞれの教育力の活用を図る。 	1段階：自分の考えだけで学級経営や業務を推進している。 2段階： 3段階： 4段階（達成レベル）： 5段階：
<ul style="list-style-type: none"> 学校間の交流活動を通して、人間形成、社会適応、学習活動などの様々な面で、能力が伸びるよう支援する。 	A：達成した。 B：ほぼ達成した。 C：現状維持。 D：現状より悪くなった。
<ul style="list-style-type: none"> 関係機関への啓発活動や、幼・保・小・中・高等学校などからの障害のある児童生徒への支援や教材などに関する相談への対応に努め、地域のセンター的役割を果たす。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼、保、小、中、高に対しての特別支援教育に関する情報の発信回数：年3回 A：達成した。 B：ほぼ達成した。 C：現状維持。 D：現状より悪くなった。
<ul style="list-style-type: none"> 関係機関との連携：医療や福祉等との連携を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学期に保護者と懇談を行い、目標を作成し、活用する。 10月（中間）と2月（総括）に目標の評価を行い、訂正を加える。 校内で個々の幼児児童生徒の実態を報告し合い、職員全員で同じ支援目標に向かって支援する。 4：十分達成できている。 3：おおむね達成できている。 2：どちらかというとな達成できていない。 1：ほとんど達成できていない。
<ul style="list-style-type: none"> 職業的自立に向けた「地域の関係機関との連携」（障害者就労連絡協議会やハローワーク等との連携）を強化し、卒業後の自立と社会参加を支援している。 	A：十分当てはまる。 B：ほぼ当てはまる。 C：あまり当てはまらない。 D：当てはまらない。
<ul style="list-style-type: none"> 「地域ボランティア」（管内の高校生等）を募ったり、地域の小・中学校との「交流及び共同学習」を積極的に推進したりすることにより、地域と共に学ぶ機会を大切にしている。 	A：十分当てはまる。 B：ほぼ当てはまる。 C：あまり当てはまらない。 D：当てはまらない。

<p>・関係機関と連携した教育実践を行う：</p> <p>①指導を行う際、医療・PT・ST・OT や看護師等の専門家との連携を図り、指導実践する。</p> <p>②指導を行う際、本人や保護者のニーズに即した指導実践に取り組む。</p> <p>③相談に対し、ケース会議等を開き、組織的に対応する。</p>	<p>①の評価指標</p> <p>4：医療・PT・ST・OT や看護師等の専門家との協働による指導を実践した。</p> <p>3：指導について、医療・PT・ST・OT や看護師等の専門家に相談した。</p> <p>2：校内の身近な関係者と相談しながら指導実践した。</p> <p>1：指導に関して、専門家や関係者との相談はしていない。</p> <p>②の評価指標</p> <p>4：本人や保護者のニーズを確認し、その内容について、保護者と連携を取り合いながら、日々の指導実践に取り組んだ。</p> <p>3：本人や保護者のニーズを確認し、その内容について、日々の指導実践に取り組んだ。</p> <p>2：本人や保護者のニーズを確認し、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成した。</p> <p>1：保護者との連携が不足していたと感じる。</p> <p>③の評価指標</p> <p>4：相談に対し、校内でのケース会議等で協議したり、関係機関と連携したりして対応した。</p> <p>3：相談に対し、校内でのケース会議等で協議して対応した。</p> <p>2：相談に対し、身近な関係者で協議して対応した。</p> <p>1：相談なし。</p>
<p>・外部の ST、PT の指導や助言を実践の充実に有効に機能させること。</p>	<p>・よくできている。</p> <p>・だいたいできている。</p> <p>・あまりできていない。</p> <p>・できていない。</p> <p>・わからない。</p>
<p>・ボランティア活動：</p> <p>①ボランティア活動の目標や方針が設定され、教職員が共通理解をしている。</p> <p>②実施するための体制・組織や役割分担を明確にしている。</p> <p>③実態に即した奉仕体験活動やボランティア活動等を計画的に実施している。</p>	<p>5：取り立てて問題が発生しない限り達成できるレベル</p> <p>4：わずかな努力で達成できるレベル</p> <p>3：努力すればできる目標のレベル</p> <p>2：かなりの努力を要するレベル</p> <p>1：一生懸命にやってみると達成できるレベル</p>
<p>・保護者、地域、関係機関との共通理解を深めるため、連携強化と啓発に努めている。：</p> <p>①学校開放講座を年間 6 回以上実施している。</p> <p>② web ページ等の情報発信を年間 2 回以上実施している。</p>	<p>空欄</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関との連携：医療や福祉機関と連携し、個別の教育支援計画の策定を行う。 ・学校間連携の充実：特別支援学校として、センター的役割を担う。 ・本校教育活動の理解・啓発：広く地域や関係機関に本校のことを知ってもらう。 	<p>4：十分達成できている。</p> <p>3：どちらかという達成できている。</p> <p>2：どちらかという達成できていない。</p> <p>1：ほとんど達成できていない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・交流教育の指導計画と展開：交流教育の意義や活動方針について教職員が共通理解をし、実施している。 	<p>4：達成できている。</p> <p>3：ほぼ達成できている。</p> <p>2：あまり達成できていない。</p> <p>1：達成できていない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会との連携：地域社会の自然・施設・人材等を活用し連携を図った活動を行っている。 ・関係機関との連携：日中一時支援事業所等と連携・協力を図っている。 	<p>4：達成できている。</p> <p>3：ほぼ達成できている。</p> <p>2：あまり達成できていない。</p> <p>1：達成できていない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・関係機関との連携・支援会議の実施：当該学年度で各関係機関も参加して、支援会議を開く。 ・保護者や A 整肢学園との連携：保護者や関係機関との連携を密にし、指導の効果を高めるため、共通理解を図る。 ・対象児童の体調による未実施分を除いては、関係機関も参加して実施することができた。保護者の希望もあるが、今後も支援会議の意義を理解していただき、対象学年またそれ以外でも、必要に応じて開催していきたい。 ・関係機関や保護者への発信はされているが、保護者の 100%の参加は難しいのが現状である。 ・学級だより等による情報発信、学園との密な連絡等を通して、保護者や関係機関等との連携協力を努めることができた。 ・緊密な連絡・報告等を行うことで、関係機関とは誤解や行き違いのないように努めたい。 ・保護者への連絡を密にして、学校行事等へのより多い参加を得たい。 ・毎月学級だよりを発行し、学校内の様子や担当児童の学習の様子を知らせた。授業参観や懇談会等の連絡を電話や手紙で行い、保護者の意向を聞くように努めたい。 	<p>空欄</p>

<p>・交流教育の推進と体験的な学習の充実： ○学部別計画による学校間交流と居住地交流を行う。 ○S 高校吹奏楽部との交流演奏会 ○学部別計画による体験学習（校外学習）、総合的な学習の時間を通じて、豊かな心とたくましく生きる力を育む。</p>	<p>空欄</p>
<p>・個に応じた進路指導の充実に努める。：関係機関との連携や進路先の開拓などを通して、進路選択に必要な情報を継続的に収集し、発信する。</p>	<p>(取組指標) 児童生徒の進路や福祉制度・サービス等に関する研修を受けたり、企業・施設の見学をしたりして、進路に関する情報を収集した。 A：積極的に研修・見学に参加したり、情報収集を行ったりした。 B：必要に応じて研修・見学に参加したり、情報収集を行ったりした。 C：あまり研修・見学に参加したり、情報収集を行ったりしなかった。 D 全く研修・見学に参加したり、情報収集を行ったりしなかった。 (成果指標) 進路先や福祉制度・サービスに関する相談に対応したり、進路に関する学習の指導に生かしたりできた。 A：進路に関する相談や指導に大いに役立った。 B：進路に関する相談や指導に概ね役立った。 C：進路に関する相談や指導にあまり役立たなかった。 D：進路に関する相談や指導にほとんど役立たなかった。 (満足度指標) 進路選択に役立つ進路先の情報や福祉制度・サービスの情報を得ることができた。 A：進路に関する多くの情報を得ることができた。 B：進路に関する情報をある程度得ることができた。 C：進路に関する情報が不足していた。 D：進路に関する情報がほとんど得られなかった。</p>
<p>・関係機関との連携を図る：保護者に対して、施設利用の際に活用できるサポートブックの作成支援を行う。</p>	<p>(取組指標) 必要と思われる児童生徒の保護者に、サポートブックの作成及び活用を進めた。 A：必要と思われる児童生徒の保護者に、学校全体及び相談部で作成や活用を勧めた。 B：必要と思われる児童生徒の保護者に、クラス及び担任レベルで作成や活用を勧めた。 C：必要と思われる児童生徒の保護者にあまり作成や活用を勧めなかった。</p>

	<p>D：作成や活用を全く勧めなかった。 (成果指標) その子に応じた活用しやすいサポートブックが作成できた。</p> <p>A：適切に作成できた。</p> <p>B：概ね適切に作成できた。</p> <p>C：あまり適切に作成できなかった。</p> <p>D：全く適切に作成できなかった。</p> <p>(満足度指標) サポートブックの作成支援は、児童生徒や保護者にとって役に立っている。</p> <p>A：大変役に立っている。</p> <p>B：概ね役に立っている。</p> <p>C：あまり役に立っていない。</p> <p>D：全く役に立っていない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 市内の小中学校を訪問し、つながりをつくるともに各学校の支援ニーズの把握に努めたか。 学校の要請の応じて心理検査の実施や校内研修の講師派遣を行うなど学校支援に努めたか。 	<p>4：十分達成できている、進歩している、または今年度特に工夫、改善がみられた。</p> <p>3：概ね達成できている、進歩しているが、部分的に工夫、改善の余地がある。</p> <p>2：どちらかという達成できていない、進歩していない、工夫・改善を検討すべき。</p> <p>1：ほとんど達成できていない、進歩していない、工夫・改善すべきである。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 保護者、地域、関係機関に学校の教育活動の状況を具体的に伝えているか。 	<p>①学校公開を年間5日間以上実施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業参観や授業参観週間を設定し、日常の活動の様子を紹介する。 学校祭・体育祭をはじめ一般公開が可能な行事をポスターやWebページ上で知らせる。 <p>②学校からの便り等で情報発信を行い、保護者の80%以上から満足を得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ通信 学年通支援 連絡ノート等で学校の様子を伝える。
<ul style="list-style-type: none"> 保護者、地域、関係機関との共通理解が深まり、有効な支援が行われているか。 	<p>「個別の教育支援計画」について 活用した保護者の80%以上から満足を得ている。 (保護者面談や家庭訪問で進路希望について確認し、正確な進路情報を把握するとともに、進路実現に向けて短期・長期の適切な目標を設定し記録する。)</p> <p>「スクールボランティア活動制度」について</p> <ul style="list-style-type: none"> 登録者には年1回以上活動に参加していただく。 校外学習・学校行事等で介助ボランティアを依頼し、地域で生きる生徒の能力を向上させると共に学校理解につなげる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会人講師として授業ボランティアを依頼し、地域で生きる生徒の能力を向上させると共に学校理解につなげる。 <p>「学校間や地域住民との計画的な交流」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年間3回以上実施している。(近隣の高校や養護学校との交流会を行う。地域住民(ボランティアも含む)との交流。生徒が参加できる地域の行事について紹介し、参加を促す。)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者、地域、関係機関に学校の教育活動の状況を具体的に伝えているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 80%以上の保護者が学年保護者会、学級懇談会・学年保護者行事等に積極的に参加している。 ・ 地域や関係機関等へ、学校の様子を年3回以上具体的に伝えている。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者、地域、関係機関との共通理解が深まり、有効な支援が行われているか。 <ol style="list-style-type: none"> ①地域の福祉等関係機関を年間延べ20カ所以上訪問して、情報交換に努めている。 ②新転入児童生徒について、担任や担当者等が関係機関を訪問して、情報交換に努めている。 ③児童生徒がリハビリ等を受けている医療機関等を訪問して、情報交換に努めている。 ④居住地校交流、共同学習の内容・方法等に保護者の80%以上が満足している。 ⑤校外学習の内容・方法等に、保護者の80%以上が満足している。 ⑥R 整肢療護園での治療やリハビリが必要な児童生徒にかかわる連携を定期的に行っている。 	<p>A：十分に達成できた。</p> <p>B：達成できた。</p> <p>C：もう少しで達成できた。</p> <p>D：達成できなかった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 特別支援学校の機能と役割並びに関係機関との連携 	<p>数値目標：年12回</p> <p>2：達成した(予定を含む)。</p> <p>1：達成できない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 交流・共同教育： <ol style="list-style-type: none"> ①地域の学校や地域の人々との交流の場を設定し、人とかかわる力や地域社会で生活する力を育てることができたか。 ②学校の様子を地域や居住地の学校などに発信したり、お便り・手紙などの間接的な交流を継続してできたりしたか。 	<p>空欄</p>

<p>・地域との交流を深め、地域に貢献する学校：</p> <p>①関係機関との連携のもと、学校間交流、居住地校交流、地域交流を推進し、社会生活に必要な素地を養う。</p> <p>②地域広報誌の内容を工夫しながら、本校の教育活動についての情報を発信し、本校への理解を深めるとともに、本校の学校行事等への参加の機会を拡充する。</p> <p>③地域の小・中学校等のニーズを把握し、ニーズに応える支援体制を充実させる。</p>	<p>A：十分達成できている。</p> <p>B：達成できている。</p> <p>C：概ね達成できている。</p> <p>D：不十分である。</p> <p>E：できていない。</p>
<p>・交流教育の充実：交流を通し、児童生徒間や職員間の親交が深まったか。→交流相手校と連携しながら、各校の交流の目標を達成すること。</p>	<p>空欄</p>
<p>・地域における豊かな生活づくりのための交流及び共同学習の推進。</p> <p>①地域の小・中学校、高等学校との学校間交流や居住地校交流を推進する。</p> <p>②豊かな心育成事業と関連付けた地域花いっぱい運動や清掃活動等の地域奉仕活動を実施する。</p> <p>③子供たちの居住地における生活の基盤づくりを目指した地区PTA活動の推進と支援に努める。</p> <p>④地区合同懇談会等を開催し、地域の関係機関との連携を図る。</p>	<p>空欄</p>
<p>・外部専門家との連携教育</p>	<p>A：外部専門家と連携した研修会を多数開催し、本校や他校の期待に沿う内容だった。</p> <p>B：外部専門家と連携した研修会を数回実施し、本校や他校の職員のニーズに概ね応えた。</p> <p>C：外部専門家と連携した研修会の実施は、あまり多くなかった。</p> <p>D：外部専門家と連携した研修会の実施は、ほとんどなかった。</p>
<p>・支援会議の回数の増大</p>	<p>A：希望者に対して関係機関と連携しながら支援会議を持ち、目的が十分に果たせた。</p> <p>B：必要に応じて支援会議を持ち、支援方針を共通理解し合った。</p> <p>C：必要に応じて支援会議を持ったが、目的が十分に果たせなかった。</p> <p>D：必要に応じた支援会議が開催できなかった。</p>

<p>・障害のある幼児・児童・生徒・成人に関する関係機関との連絡を密にし、パンフレット・ポスターの配布、広報誌・新聞掲載依頼等理解啓発活動を実施する。</p>	<p>4：関係機関との連絡や理解啓発を実施して、十分に地域ネットワーク化を推進できた。 3：関係機関との連絡や理解啓発を実施して、地域のネットワーク化に努めた。 2：関係機関との連絡や理解啓発を実施したが、地域との連携が取れなかった。 1：関係機関との連絡や理解啓発活動が実施できなかった。</p>
<p>・K教育事務所管内の肢体不自由特別支援学級設置校及び、知的障害特別支援学校等との連携を図る。</p>	<p>A：合同学習に対象児童生徒の5割以上が参加した。 B：合同学習に対象児童生徒の4割以上が参加した。 C：合同学習に対象児童生徒の3割以上が参加した。 D：合同学習に対象児童生徒の3割未満が参加した。</p>
<p>・学校間交流や学校周辺での地域交流、校外学習先での交流の様子について、保護者への情報提供を充実する。</p>	<p>A：地域交流や校外学習先での交流の様子がよく分かった。 B：地域交流や校外学習先での交流の様子がおおむねわかった。 C：地域交流や校外学習先での交流の様子があまり分からなかった。 D：地域交流や校外学習先での交流の様子が分からなかった。</p>
<p>・近隣の保育所・幼稚園、学校の教職員、及び保護者を対象とした講座を開催し、地域の研修センターとしての役割を果たす。</p>	<p>参加者全員に対するアンケート調査： A：大変参考になった。 B：参考になった。 C：あまり参考にならなかった。 D：参考にならなかった。</p>
<p>・A医療福祉センターとの連携協力。</p>	<p>A：十分良い。 B：概ね良い。 C：やや不十分。 D：不十分。</p>
<p>・学校間交流や居住地校交流において本校児童生徒の社会性の育成と相互理解を目指し、本校教育課程上の位置付けを明確にし、計画的・継続的な交流実践を行う。</p>	<p>空欄</p>

<p>・幼児児童生徒の地域における豊かな生活の実現</p> <p>1. 保護者、地域、関係機関に、学校の教育活動の状況を具体的に伝えているか。</p> <p>2. 保護者、地域、関係機関との共通理解が深まり、有効な支援が行われたか。</p>	<p>1について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校公開を年3回以上行う。 ・施設の開放を年間3回以上行っている。 ・学校からのたより等で情報発信を行い、80%以上の保護者から満足を得る。 ・ホームページの更新を年度初め、各学期末、各学部の主要な行事の前後に行っている。 <p>A：十分達成できた。 B：達成できた（具体的数値目標達成）。 C：もう少しで達成できた。 D：達成できなかった。</p> <p>2について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「個別の教育支援計画」（「個別の指導計画」を含む）について、80%以上の保護者から理解を得ている。 ・学校間交流や居住地校交流が、年間延べ8回以上行われている。 <p>A：十分達成できた。 B：達成できた（具体的数値目標達成）。 C：もう少しで達成できた。 D：達成できなかった。</p>
<p>・居住地校交流が障害者理解、相互の学び合いの場になっていますか。</p>	<p>A：十分に達成できた（～成果があった、～している等、達成率80%以上）。</p> <p>B：達成できた（成果があった、している等、達成率60%以上）。</p> <p>C：もう少しで達成できた（少し成果があった、少ししている等、達成率60%以下）。</p> <p>D：達成できなかった（成果がなかった、しなかった等、達成率25%以下）。</p>
<p>・地域・関係機関との連携を強くし、交流教育を積極的に推進する。</p>	<p>4：よい。</p> <p>3：おおむねよい。</p> <p>2：少し課題あり。</p> <p>1：課題あり。</p>
<p>・地域における相談機能の充実：</p> <p>①地域の関連機関と情報交換をしながら、地域や保護者のニーズを把握する。</p> <p>②地域の保護者や就学前の子どもが参加活動できる場を設ける。</p>	<p>①関連機関と連携した会に参加した回数は</p> <p>A：年7回以上 B：年5回以上 C：年3回以上 D：年1回以上</p> <p>②保護者や幼児が参加できる会を</p> <p>A：年3回以上実施した。 B：年2回実施した。 C：年1回実施した。 D：1回も実施しなかった。</p>

(3) 専門性の向上に関して

a. 評価項目の内容

専門性の向上について、各学校の自己評価シートをKJ法で整理したところ、以下のような内容に整理できた。

b. 実践面での専門性向上

①授業研究による実践力の向上

- ・児童生徒一人一人の実態や教育的ニーズに応じた適切な指導が行われているか。
- ・個に応じたきめ細かな指導を行っているか。
- ・児童生徒の課題を的確にとらえて教材を製作し、授業に生かしているか。
- ・障害等に応じた指導実践力を向上させるために、授業研究を推進し、それを踏まえた授業改善を行っているか。

②研究成果の蓄積

- ・研究物や事例集などにまとめ、情報を蓄積・発信しているか。
- ・教材に関するデータの共有化（自作教材・教具集の充実など）が図られているか。

c. 専門性向上のための研修

①専門分野に関するスキルアップ

- ・専門分野に関するスキルアップという観点からの研修がなされているか。

例えば、視覚障害教育であれば、歩行、点字、生活技術、重複障害教育、弱視教育、情報教育についての専門性など

②障害特性に応じた指導に対応できる専門性の向上

- ・専門分野のみならず、旧来の5障害種及び発達障害に関する特別支援教育全般にわたる研修がなされているか。
- ・発達障害のある児童生徒の「障害特性」に関する専門的知識を深める。

③報告会の実施と情報の共有化

- ・外部研修を個人で終わらせないために、報告会の実施と情報の共有化についての取組がなされているか。

④自校での研修

- ・特別支援教育に関する専門的資質や能力を高めるための各種研修会等が実施されているか。
- ・研修会の工夫と充実に努めているか。
- ・研修会の実施の経過がまとめられているか。
- ・教員一人一人が、自己目標達成のための専門的研修に努めているか。
- ・外部講師を招いての研修を実施し、専門性向上に役立てているか。
- ・広く校外にも広報して、参加者を募った研修会が実施されているか。

⑤外部の研究会・研修会の活用

- ・教育センター等と連携し、特別支援教育に関する研修会が実施されているか。

⑥新赴任教職員への研修体制

- ・新しく赴任した教職員に対する研修体制が整備されているか。

表3-3 専門性に関する評価シートの記載内容

目標及び具体的取組	評価指標・達成段階・評定
<p>・発達障害や5障害に関する研修に務め、障害に合わせた指導実践に取り組む。</p>	<p>4：発達障害や5障害に関する研修会等に参加し、研修会等で学んだ内容を日々の指導実践に生かすことができた。</p> <p>3 発達障害や5障害に関する研修会等に参加した。</p> <p>2：発達障害や5障害に関する研修会等に関する研究物や書物を読んで研修した。</p> <p>1：研修しなかった。</p>
<p>・障害特性に合わせた指導実践について授業研究等を行い、授業改善に取り組む。</p>	<p>4：外部講師を招聘して研究授業を行い、授業改善に取り組んだ。</p> <p>3：校内での研究授業を行い、授業改善に取り組んだ。</p> <p>2：身近な関係者と授業研究に取り組んだ。</p> <p>1：授業研究していない。</p>
<p>・作成した教材や指導実践した内容を研究物や事例集などにまとめ、情報を蓄積・発信する。</p>	<p>4：指導実践を研究物や事例集にまとめ、研究発表会や研修会などで事例発表するなど、情報発信することができた。</p> <p>3：指導実践を研究や事例集等にまとめることができた。</p> <p>2：指導実践を記録に残すことができた。</p> <p>1：指導の記録を残していない。</p>
<p>・特別支援教育に関する種々の研修会等を大学・学部と共同で企画・開催し、現職教員の資質向上を図る。：</p> <p>○スキルアップ研修</p> <p>○各種研修会</p>	<p>A：達成されている 4点</p> <p>B：ほぼ達成されている 3点</p> <p>C：あまり達成されていない 2点</p> <p>D：達成されていない 1点</p>
<p>・特別支援教育に求められる教員一人一人の専門的資質・能力を高める研究・研修の充実：</p> <p>①一人一人の教育的ニーズに応じた実践的研究を一層推進する。</p> <p>②外部講師招聘等による授業研究の推進に努める。</p> <p>③「集合指導」、公開研究会など、他校の研究会・研修会への参加を推進し、報告会の実施と情報の共有化を図る。</p> <p>④全体研修会・学部研修会等の工夫と充実に努める。</p> <p>⑤新しい教員評価を計画的に実施するとともに、教員一人一人が自己目標達成のための専門的研修を行う。</p>	<p>空欄</p>

<p>・教員の専門性の向上</p>	<p>A：専門性を高めるための研修会に一人が二つ以上参加し、学校全体の専門性が高まった。 B：校内の研修会にはほぼ休まず積極的に参加し、専門性の向上に努めた。 C決められた研修会には参加したが、主体的な参加姿勢ではなかった。 D：校内の研修会も休みがちで、専門性が向上したか自信がない。</p>
<p>・児童生徒の課題を的確に捉えて教材を製作して、授業に生かす。また、その教材に関するデータの共有化を図る（自作教材・教具集の充実）。</p>	<p>・自作教材を製作した教員のうち、サーバーにデータを入力した者の割合が A：80%以上である。 B：70%以上である。 C：60%以上である。 D：60%未満である。</p>
<p>・歩行、点字、生活技術、重複障害教育、弱視教育、情報教育の専門性を全職員が身に付ける。</p> <p>①6つの研修グループに分かれて専門研修を深める。：各グループ別に月1回以上研修会を開き、その経過をまとめる。</p> <p>②盲学校に新しく赴任した教職員に視覚障害教育について初歩的な研修を用意する。：新任研修を10回、フォローアップ研修を2回教員が講師となって行う。</p> <p>③中央の講師を迎え、広く校外にも広報して研修の機会とし、専門性向上に役立てる。：教育センターと連携し、特別支援教育講座を開催する。</p> <p>④中国・四国地区盲学校研究大会の主管校として責任を果たす。：事前の準備を綿密に行い、全教職員が協力して大会開催に取り組む。</p>	<p>A：目標以上のことが達成できた。 B：目標を達成することができた。 C：あまり達成できなかった。 D：達成できなかった。</p>
<p>・生徒一人一人の実態に応じた適切な指導をしているか。</p> <p>・個に応じたきめ細かな指導を行っているか。</p>	<p>・一人一人の学習状況について「個別の指導計画」をもとに職員間で確認する機会を年間3回程度実施している。</p> <p>・「個別の教育支援計画」の作成・実施について、保護者の80%以上から理解を得ている。</p> <p>・「個別の教育支援計画」に基づいた指導の結果について、保護者の80%以上が満足している。</p> <p>・生活習慣の定着を図るために、家庭と学校が連携して2項目以上取り組んでいる。</p> <p>・80%以上の生徒が、自ら進んで挨拶ができる。</p> <p>・生徒には年間3回、保護者には年間2回の定期的な教育相談と、いつでも相談できる教育相談の機会を設けている。</p>

(4) 地域支援に関して

a. 「地域支援」にかかわる評価項目の内容の整理

地域支援については、各学校のシートをKJ法で整理したところ、以下のような内容に整理できた。地域支援の内容は多岐にわたるため、他の分野と重複する点も多かったが、可能な限り整理し、地域支援として重要度が高いと思われるものを優先して取り上げた。

b. 小・中学校等への支援

小・中学校等への支援は、センター的機能とも大きくかかわっており、評価シートの作成に当たっては、内容が重複しないように留意する必要がある。本稿では、小・中学校等への支援が明確な評価項目を抽出した。それらを整理すると、以下のようなカテゴリーに分類することができた。

①連携の程度

- ・小・中学校等との連携が計画通り実践され、連携の程度が的確に把握されているか。

②情報の提供

- ・小・中学校等に地域支援の情報を伝えているか。
- ・小・中学校等へ研修案内、教材紹介などの情報提供を行っているか。

③個別の教育支援計画、個別の移行支援計画の活用

- ・小・中・高の教員間の共通理解と連携を図るツールとして、個別の教育支援計画や個別の移行支援計画を活用しているか。

④校内教職員の共通理解

- ・教職員間で交流教育について共通理解が図られ、積極的に推進されているか。

⑤助言・支援・講師派遣

- ・小・中学校等の特別支援教育を必要としている児童生徒等の学習への助言・援助ができていないか。
- ・総合的な学習や福祉体験に関して、児童生徒等の受け入れや講師派遣を行っているか。
- ・地域の小・中学校等の特別支援学級等在籍児童生徒の保護者や、その担任等を支援するための教育相談、校内研修会への講師や助言者の派遣依頼に答えているか。

⑥特別支援教育コーディネーターの機能

- ・小・中学校等の支援に、特別支援教育コーディネーターの役割が果たされているか。

⑦理解啓発

- ・小・中学校等に、特別支援教育に関する理解啓発活動を行っているか。
- ・近隣の小・中学校等との交流を通し、障害児理解の推進ができていないか。

⑧巡回による支援

- ・地域の小・中学校等からのニーズに応じて学校を訪問し、きめ細かな支援を行っているか。
- ・小・中学校等への巡回相談等を通じた地域の支援は、円滑に進めることができたか。

⑨研修会の実施

- ・地域の小・中学校等に対し、特別支援教育にかかわる研修や相談などの支援をしているか。
- ・小・中学校等の依頼に応じて、在籍する児童生徒等に関する理解を進めるための授業を実施しているか。

⑩地域連絡協議会との連携と活用

- ・学区域等の連絡協議会と連携し、その活用を図っているか。

c. 相談機能の充実

①外部の幼児児童生徒に対する相談への対応

- ・地域の要請に応じて、外部の幼児児童生徒に対する教育相談や支援に応じるなど、相談支援機能を発揮しているか。
- ・外部からの電話相談・メール相談等に対応しているか。
- ・教育委員会の要請に基づいた教育相談が実施されているか。

②ニーズへの配慮

- ・地域の障害児者や相談者のニーズに応じた教育相談や就学相談が行われているか。

③相談の活用

- ・相談や支援を行った結果を把握、分析し、相談員の専門性向上に役立てているか。
- ・教育相談活動を充実させ、他機関と連携して地域の学校や障害児者に対する支援センターとしての役割を果たしているか。

d. センターの機能の充実

- ・地域の特別支援に関するセンター的な役割を果たしているか。

①研修や指導への対応

- ・特別支援センターとして研修や指導に協力しているか。
- ・センター的機能について、共通理解を図りながら、小・中学校等への支援や交流及び共同学習の活発化を図っているか。
- ・地域の特別支援教育のセンターとして、特別支援教育の理解推進と地域支援の充実を図っているか。

②体制整備

- ・センター的機能を推進するために、進路・地域支援のための充実・構成員・人材育成等々の校内体制の整備が進んでいるか。
- ・センター的機能充実のための体制整備が進んでいるか。

③連携度の評価

- ・センター的機能を発揮する学校として、学校は家庭・地域や関係機関との連携を密に図ることができたか。
- ・保健師や各校の養護教諭をはじめとした関係者や機関との連携促進を図ることができたか。

④懇談会の開催

- ・地域のセンター的機能や役割を推進するための懇談会を開催しているか。

⑤理解啓発

- ・センター的役割を推進するために、保護者や地域、他校への理解・啓発活動を実施しているか。
- ・リーフレット、回覧板、新聞発行やWebを活用するなどして、効果的・効率的な情報発信が行われているか。
- ・学校評議員会や地域特別支援教育連携協議会の機会をとらえ、地域の人々に対して、特別支援教育に対する理解と認識を深めるとともに、関係者や関係機関とのネットワークの基盤づくりを進めているか。

⑥巡回指導

- ・近隣の障害のある子どもたちに対して、巡回による専門的な指導を行っているか。

- ・地域の要請に十分応えた巡回指導が実施できたか。
- ⑦開かれた学校づくり
 - ・施設開放や学校公開・授業参観等が推進されたか。
 - ・地域支援にかんする情報が提供されたか。
- ⑧人権とのかかわりが考慮されているか。
 - ・特別支援教育と合わせて、人権・同和問題に対する啓発活動が推進されているか。
- ⑨研修会の開催
 - ・特別支援教育に関する専門性を高めるための研修の推進を図り、その充実に努めているか。
 - ・特別支援教育の推進を図るための研修会を充実させ、研修会・授業研究等が計画的に企画・実施されているか。
 - ・地域の小・中学校等の教員のニーズなども積極的に把握し、公開研修会が開催されているか。
- ⑩校内体制の整備
 - ・校内での他学部や他分掌等関係部署の協力・連携による支援体制の確立が進められたか。
- ⑪特別支援教育コーディネーターの活用
 - ・特別支援コーディネーターの配置による相談支援機能の充実が図られたか。
 - ・特別支援教育コーディネーターを中心として、地域支援や関係機関との連携が図られたか。
- ⑫卒業生や地域の障害児・者との交流
 - ・サマースクールなどの活動を通して、家族や在籍校の先生方に必要な支援を行うことができたか。
- ⑬人材活用
 - ・地域ボランティア、中学生や高校生のボランティアとの連携及び交流は充実しているか。
 - ・ボランティア養成事業を実施しているか。
 - ・外部のボランティア養成講座の活用など、外部の人材等の活用の具体的方策が組織的に検討されているか。
 - ・授業等の学校活動での外部の人材等の積極的な活用がなされているか。

表3-4 「地域支援」に関する自己評価シートの記載内容

目標及び具体的取組	評価指標・達成段階・評定
・小・中学校等への相談・支援の充実： <input type="checkbox"/> 社会福祉協議会との連携によるボラ育成を図る。 <input type="checkbox"/> 小・中学校等との連携を図る。 <input type="checkbox"/> 学区域連絡協議会の活用を図る。 <input type="checkbox"/> 就学前及び保健福祉機関教育連絡協議会の活用を図る。 <input type="checkbox"/> 来校型事業の計画的な推進を図る。 <input type="checkbox"/> 小・中学校等支援の指定校として計画的な事業の推進を図る。 <input type="checkbox"/> 指導体制の検討を行う。	・社会福祉協議会との連携が図れたか。 ・学区域連絡協議会の活用が図れたか。 ・小・中学校等との連携が図れたか。 ・支援の充実が図れたか。 ・学部コーディネーターの活用が図れたか。 ・巡回相談の件数 ・来校による相談の件数 ・指導体制が整備され、機能的であるか。 A：ほぼ達成（8割以上） B：概ね達成（6割以上） C：変化の兆し（4割以上） D：不十分（4割未満）

<p>・教育相談の充実を図るとともに、専門性を生かした地域支援を行い、特別支援教育の充実に努める。</p>	<p>・地域や幼稚園、学校等への支援 1～5の5段階で評価。</p>
<p>・来校による支援： ○近隣の聴覚障害のある子どもたちへの専門的な指導を行う。 ○保護者と連携して、子どもを支援する。</p>	<p>・毎日(中学部においては週1回)、掲示黒板に様々な話題を書き、その話題を利用して日常語彙の拡充を図る。 ・毎日、日記等をチェックし、語句や助詞の間違いを訂正する。 4：十分達成できている。 3：おおむね達成できている。 2：どちらかというとな達成できていない。 1：ほとんど達成できていない。</p>
<p>・巡回による支援： ○地域の小・中学校等からのニーズに応じて学校を訪問し、きめ細かな支援を行う。 ○地域支援教室をM市やH市で継続的に開催する。</p>	<p>・日常会話をする際、口話で伝わらない時には、手話や指文字、筆談を利用して会話する。 ・日常会話の際、会話が伝わらない時には、状況に応じて手話、筆談を利用できるよう指導する。 4：十分達成できている。 3：おおむね達成できている。 2：どちらかというとな達成できていない。 1：ほとんど達成できていない。</p>
<p>・特別支援センターとしての機能の充実に関して、特別支援センターとして研修や指導に協力する。</p>	<p>4：研修会の講師や自作教材の紹介、授業公開など、地域支援にかかわった。 3：研修会の講師や自作教材の紹介、授業公開など、地域支援に貢献する準備や心づもりがある。 2：地域支援の必要性や現状を理解している。 1：地域支援の必要性や現状がわからない。</p>
<p>・特別支援センターとしての機能の充実に関して、特別支援センターの機能を充実するための体制を整備する。</p>	<p>4：相談・情報提供、連絡・調整、教員への支援、研修・指導協力、調査研究等、特別支援教育センターの何らかの事業にかかわった。 3：相談・情報提供、連絡・調整、教員への支援、研修・指導協力、調査研究等、特別支援教育センターの機能について理解している。 2：相談・情報提供、連絡・調整、教員への支援、研修・指導協力、調査研究等、特別支援教育センターの何らかの機能について理解している。 1：相談・情報提供、連絡・調整、教員への支援、研修・指導協力、調査研究等、特別支援教育センターの機能について現状がわからない。</p>
<p>・開かれた学校づくり ○施設開放や学校公開・授業参観等の一層の推進 ○小中学校、高校、就学前の幼稚園、保育園を訪問し本校を紹介し地域支援の情報を伝える。 ○地域支援部を中心に地域支援の情報を提供する。</p>	<p>・施設開放の増加、学校公開、授業参観の参加人数 ・保護者アンケートの結果 ・コーディネーターの活動状況や地域支援の状況 ・教育相談の件数 ・小中学校等へのアンケートの結果</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・センター的機能の向上と支援籍学習、交流及び共同学習の活発化： <ul style="list-style-type: none"> ○支援相談部、コーディネーターを中心に、全校で地域の特別支援教育のニーズに応える。 ○支援籍学習の増加（小・中学校支援籍、養護学校支援籍）。 ○交流及び共同学習の実施と内容の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の小・中学校等へのアンケート結果 ・支援籍学習の人数、内容、双方の満足度 ・交流及び共同学習の内容や児童生徒の変容
<ul style="list-style-type: none"> ・地域における特別支援教育のセンター的役割の充実を図る。 ・特別支援教育に関する専門性を高めるための研修の推進を図り、その充実に努める。 	<p style="text-align: center;">空欄</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・センター的機能の整備・紹介を進め、保健師や各校養護教諭をはじめとした関係者や機関との連携促進を図る： <ul style="list-style-type: none"> ①難聴教育研修会を充実させ、出前研修会・授業等を企画・実施する。 ②本校の地域支援活動を整理して、リーフレット等にまとめるとともに、関係機関やニーズを持つ保護者に、効果的・効率的に紹介していく。 ③本校の卒業生や地域の難聴児・者との交流行事を、サマースクールなど、既存の活動（行事）の中で設定する。家族や在籍校の先生方に対しても必要な支援を行う 	<p style="text-align: center;">空欄</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・地域における特別支援学校のセンター的（教育相談・地域支援）を積極的に行うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大変重要である ・やや重要である ・あまり重要でない ・重要でない
<p>(4) 地域の特別支援教育センター的役割</p> <ul style="list-style-type: none"> ○交流、教育相談、公開研究会、各種研究会等を通して、地域の特別支援教育センターとしての役割を担っているか。 ○地域ボランティア、中高生ボランティアとの交流は充実しているか。 ○近隣小・中学校との交流を通し、障害児理解の推進ができているか。 ○学校見学会、体験学習は充実しているか。 	<ul style="list-style-type: none"> A：そう思う B：ややそう思う C：あまりそう思わない D：思わない

<p>・特別支援学校や特別支援学級の児童生徒だけでなく、附属学校、園を含め、幼稚園、保育所、小・中・高等学校在籍の特別な教育的支援を必要とする幼児児童生徒への実質的で適切な支援体制を確立する。</p> <p>○コーディネーター部会、研修</p> <p>○巡回指導</p>	<p>A：達成されている 4点</p> <p>B：ほぼ達成されている 3点</p> <p>C：あまり達成されていない 2点</p> <p>D：達成されていない 1点</p>
<p>・学生や近隣の高校生、一般社会人等を対象にしたボランティア養成講座の見直しを図るとともに人材活用の具体的方策を探る。</p> <p>○ボランティアセンターとの連携</p>	<p>A：達成されている 4点</p> <p>B：ほぼ達成されている 3点</p> <p>C：あまり達成されていない 2点</p> <p>D：達成されていない 1点</p>
<p>・交流教育を推進し、望ましい対人関係を築く力を育てるとともに、障害者等の理解啓発を図っている。</p> <p>・センター的役割を果たすために、パンフレットの活用や学校公開等を利用し、啓発に努めている。</p>	<p>4段階による評価。</p>
<p>・発達障害のある児童生徒の「障害特性」に関する専門的知識を深める。</p> <p>・一人一人に応じた自立観、勤労観、職業観をもつことができるよう各学年に応じた系統的指導を行う。</p> <p>・小・中・高の教員間の共通理解と連携を図る。</p> <p>・個別移行支援計画の作成に取り組む。</p> <p>・センター的役割を推進するために、保護者や地域及び他校への啓発活動を積極的に実施する。</p>	<p>・4段階の評価を用いる。評価の目安はおおむね下記のとおりとするが、評価とともに成果や課題を明らかにして公開する。なお、具体的方策の評価は、4～1の4段階で、具体項目に関する総合評価は、A～Dの4段階で評価を行う。</p> <p>4 (A) 十分達成できている。</p> <p>3 (B) おおむね達成できている。</p> <p>2 (C) どちらかという達成できていない。</p> <p>1 (D) ほとんど達成できていない。</p>
<p>・小・中・高等学校との連携の強化：</p> <p>①教職員が交流教育について共通理解を図るとともに積極的に推進している。</p> <p>②小・中学校の児童生徒の学習への支援をしている。</p> <p>③特別支援教育を必要としている児童生徒の支援をしている。</p> <p>④特別支援教育コーディネーターの役割を果たす教職員がいる。</p>	<p>5：取り立てて問題が発生しない限り達成できるレベル。</p> <p>4：わずかな努力で達成できるレベル。</p> <p>3：努力すればできる目標のレベル。</p> <p>2：かなりの努力を要するレベル。</p> <p>1：一生懸命にやってみると達成できるレベル。</p>
<p>・体制の整備：</p> <p>①特別支援教育のセンター的機能について、教職員が共通理解をし、その体制を整えている。</p> <p>・教育相談：</p> <p>①相談者のニーズに応じた教育相談や就学相談を実施している。</p> <p>②相談者のニーズに応じて訪問して教育相談を実施している。</p> <p>③教育、福祉、保健・医療等の関係機関と連携を図りながら、教育相談を実施している。</p>	<p>5：取り立てて問題が発生しない限り達成できるレベル。</p> <p>4：わずかな努力で達成できるレベル。</p> <p>3：努力すればできる目標のレベル。</p> <p>2：かなりの努力を要するレベル。</p> <p>1：一生懸命にやってみると達成できるレベル。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・生涯学習への支援； 障害を有する人の生涯学習を支援している。 ・（青年学級など）担当職員研修への支援：特別の支援を要する児童生徒等を担当している教職員を支援している。 ・理解・啓発：地域の人々に対して、特別支援教育のセンター的機能について理解・啓発を図っている。 ・関係諸機関との連携； 関係諸機関とのネットワーク化を推進している。 	<p>5：取り立てて問題が発生しない限り達成できるレベル。</p> <p>4：わずかな努力で達成できるレベル。</p> <p>3：努力すればできる目標のレベル。</p> <p>2：かなりの努力を要するレベル。</p> <p>1：一生懸命にやってやっと達成できるレベル。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・地域を支援するセンター的機能 ①校内体制の整備： 特別支援教育コーディネータが本校の支援状況を職員会議で定期的に報告し、特別支援に関する行内の啓発を行う。 ②相談活動の実施： 地域に在籍する0～18歳までの難聴児とその保護者に対して様々な教育相談を実施する。 ③小・中学校への支援： <ul style="list-style-type: none"> ○難聴児が在籍する保育園・幼稚園・小中学校に対して指導方法や配慮事項などの相談応じる。 ○総合的な学習や福祉体験に関して児童・生徒の受け入れや講師派遣を行う。 	<p>A：十分良い。</p> <p>B：概ね良い。</p> <p>C：やや不十分。</p> <p>D：不十分。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園、小・中・高等学校等に在籍する児童生徒の教育について、助言・援助に務めていますか。： ①外部の幼児児童生徒に対する相談対応している。 ②小・中・高等学校の依頼に応じて、在籍する児童生徒に関する理解を進めるための授業を実施している。 ③幼稚園や小・中・高等学校からの依頼に応じて校内研修等の講師を務めている。 	<p>空欄</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害教育のセンター的機能の充実： ○県下の聴覚障害児・生を対象にした仲間づくり交流会の意義が浸透しにくい。 ○通級指導や教育相談の児童や乳幼児を取り巻く家族や教員、保育士の理解が十分とはいえないケースがある。 	<p>A：十分達成（100%）。</p> <p>B：おおむね達成（80%）。</p> <p>C：変化の兆し（60%）。</p> <p>D：まだ不十分（40%）。</p> <p>E：目標・方針の見直し（30%以下）。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・地域のセンター的役割として、特別支援教育の推進を図るための研修会が計画的に行われているか。： ①教職員の指導力を地域の幼・保、小中、高等学校へ提供し、地域支援に努めている。 ②センター的機能について共通理解を図りながら小・中学校等への支援に努めている。 ③学校見学や体験学習等を通して本校の教育活動に理解を図るよう努めている。 	<p>4：思う（よい）。</p> <p>3：ほぼ思う（だいたいよい）。</p> <p>2：あまり思わない（あまりよくない）。</p> <p>1：思わない（よくない）。</p> <p>N：ノーアンサー（わからない）。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・地域におけるセンター的機能 ・体制の整備：特別支援教育のセンター的機能について、教職員が共通理解をし、巡回相談員や特別支援学級等指導員の体制をとっている。 ・教育相談：相談者のニーズに応じた教育相談を実施している。 ・理解・啓発： <ul style="list-style-type: none"> ○学校見学等を実施し、特別支援教育センター的機能について理解・啓発を図っている。 ○特別支援教育を必要としている小・中学校の支援をしている。 	<p>4：思う（よい）。</p> <p>3：ほぼ思う（だいたいよい）。</p> <p>2：あまり思わない（あまりよくない）。</p> <p>1：思わない（よくない）。</p> <p>N：ノーアンサー（わからない）。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・地域支援センター的役割（機能）の充実：地域の幼稚園・保育園、小・中学校、高等学校等に在籍する障害のある幼児、児童生徒の支援や教職員への支援を行う。 ・自立活動にかかわる相談事業：自立活動にかかわる相談を受けたり、授業を巡回して参観したりして、よりよい指導の実際的な支援をする。 	<p>空欄</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・目標：地域における特別支援教育に関するセンター的機能を充実させる。 ・計画：保・幼・小・中・高等学校等に特別支援教育に関する理解・実践力を高められるよう、啓発活動・研修会の開催等を実施する。 ・保護者・教育機関・関係機関とより良い関係を築き、相談活動を充実したものになるよう努力する。 ①小学生の相談における継続相談の比率（初回が4～12月であり、継続を必要とする個別ケース3回以上）60%以上 ②本校がセンター的役割を十分に果たしていると考えられる学校の割合（対象：108校）75% 	<p>A：達成した。</p> <p>B：ほぼ達成した。</p> <p>C：現状維持。</p> <p>D：現状より悪くなった。</p>

<p>・特別支援教育のセンター的機能について協働体制を整え、地域の要請に応じて教育相談や支援体制への協力等を行うなど、相談支援機能を発揮している。</p> <p>①チーフコーディネーターを中心とした業務推進の下で、コーディネーター会議を適宜開催。2名の担当者で教育相談のできる体制づくりに努めている。</p> <p>②地域支援ネットワーク会議へ校長の他2名が参加し、管内の状況等の情報交換、支援の実際等についての意見交換した。専門家チームへコーディネーターをそれぞれ1名ずつ派遣。局や市教育委員会の要請に基づいて巡回教育相談を実施。</p> <p>③パートナー・ティーチャー派遣事業によるA小学校及びB高校への相談支援、管内専門家チームとしてのC小学校への支援、地域教育サークル主催の特別支援教育に関する研修会への講師派遣。</p> <p>④海外親善訪問団の学校視察の受け入れ、大学や教育委員会との連携の下での介護等体験実習や10年経験者研修会の受け入れに積極的に努めた。</p> <p>⑤学校開放講座を企画立案し、チーフコーディネーター中心に各支援部門業務を推進した。</p>	<p>4：十分達成できている、進歩している、又は今年度特に工夫、改善がみられた。</p> <p>3：概ね達成できている、進歩しているが、部分的に工夫、改善の余地がある。</p> <p>2：どちらかというとは達成できていない、進歩していない、工夫・改善を検討すべき。</p> <p>1：ほとんど達成できていない、進歩していない、工夫・改善すべきである。</p>
<p>・地域の居住する障がい者の支援体制の確立に努める。：高等養護学校と連携し、本校が主催する地域の青年学級に参加できるようにし、その地域の青年学級参加者の住所管理を実施する。</p>	<p>A：本校が実施する青年学級に、他養護学校卒業者が参加する。また、今後の参加も本校が情報の承諾書を取り、住所の管理ができた。</p> <p>B：本校主催の青年学級へ他養護学校卒業生の参加はあるが、住所の管理がまだできていない。</p> <p>C：A及びBにあてはまらない。</p> <p>?：わからない。</p>
<p>・地域の特別支援教育に関するセンター的な役割として、中・高等学校に在籍する障害のある生徒の教育について、助言援助に努めているか。</p> <p>①電話相談、来校による相談、訪問による相談等、年間を通じて相談に応じる。</p> <p>②「地域の学校開放講座」として「ボランティア体験講座」を開講し、ボランティアを養成するとともに、参加者に本校の教育を理解してもらう。</p>	<p>空欄</p>
<p>・地域の特別支援教育に関するセンター的な役割を果たしているか。</p> <p>・幼稚園、小・中・高等学校に在籍する障害のある生徒の教育について、助言援助に努めているか。</p> <p>①地域の学校に対して、訪問相談を年1回以上実施し、研究協議会を年3回開催する。</p> <p>②来校相談等各種相談、研修協力、出張相談、支援会議参加を行う。</p>	<p>空欄</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・地域の特別支援教育に関するセンター的な役割を果たしていますか。 ・小・中学校等に在籍する障害のある児童生徒等の教育について、指導助言に務めています。 <ol style="list-style-type: none"> ①地域の幼児児童生徒等を支援するため、相談等の要請に年間30回以上対応している。 ②電話相談・メール相談等に年間60件以上対応している。 ③親子学習会を長期休業中等に開催し専門的な助言に努めている。 ④学校見学会、学校体験入学等に幼児児童生徒、保護者、関係者等が年間延べ30名以上参加している。 ⑤職員の対応や相談内容、方法に相談者の80%以上が満足している。 	<p>A：十分に達成できた B：達成できた C：もう少しで達成できた D：達成できなかった</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・地域のセンター的機能や役割を推進する懇談会の開催。 	<p>数値目標（年3回） 2：達成した（予定を含む） 1：達成できない</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・個に応じた校内・校外の相談支援機能の充実。 	<p>数値目標（週1回以上） 2：達成した（予定を含む） 1：達成できない</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・隣接したH小学校との充実した交流教育を推進している。：計画性、継続性のある活動や、子供の自主性に委ねた活動など、様々な交流活動の場が確保され、共に生きるという意識が育まれているか。 	<p>A：達成できている。 B：どちらかといえば達成できている。 C：どちらともいえない。 D：達成できていない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・近隣の学校や居住地の学校、学校周辺の地域との充実した交流活動が推進されている。：様々な交流活動の中で、幅広い触れ合いの場が確保され、個に応じた社会参加が行われているか。 	<p>A：達成できている。 B：どちらかといえば達成できている。 C：どちらともいえない。 D：達成できていない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・地域支援・連携： <ol style="list-style-type: none"> ①巡回指導活動（個別教育相談、研修会講師等）は地域の要請に十分応えてきたか。 ②来校支援活動（研修の場の提供、個別相談、見学・体験入学等）は充実していたか。 ③公開講座や各研修会については、回数、内容等満足のものであったか。 ④地域内の他機関や他組織との具体的な連携活動は行われていたか、進んでいるか。 ⑤校内での連携（他分掌との協力、人材バンクの運用等）は図られていたか。 ⑥行内向けや地域向けに、必要な情報の発信（たよりの発行、ホームページの更新等）に努めてきたか。 	<p>空欄</p>

<p>・小・中学校等への巡回相談等を通じた地域の支援は、円滑に進めることができたか。：センター的機能を発揮する学校として、学校は家庭・地域及び関係機関との連携を密に図ることができたか。</p>	<p>4：よい。 3：ふつう。 2：改善が必要である。 1：大幅な改善が必要である。</p>
<p>・相談支援室を利用した園や学校の関係者が実際に支援を行った結果を把握、分析し、相談員の専門性向上に役立てる。</p>	<p>(成果指標) 相談員が子供の実態や相談者に合わせたアドバイスの提供を行い、関係者が支援をすることで、児童・生徒に変容が見られたか。 相談員と協力した指導実践で、児童生徒に支援が、 A：十分できた。 B：少しできた。 C：あまりできなかった。 D：全くできなかった。</p>
<p>・特別支援教育コーディネーターとして、児童生徒が地域で生活する環境を整えるため、保護者の意識を育て、関係機関との連携を図る。</p>	<p>(努力指標) チーム支援会議を有効に機能させ、保護者、学校、関係機関との連携を深める。 チーム支援会議で話し合った支援を、 A：十分できた。 B：少しできた。 C：あまりできなかった。 D：全くできなかった。</p>
<p>・地域の小中学校を対象に、自校講師による特別支援教育に関する研修会を開催し、地域のセンター的役割を果たす。</p>	<p>(満足度指標) 地域の学校等の教育活動に役立つ内容であったか。 研修会の内容は、センター的役割として A：十分成り立っている。 B：ある程度成り立っている。 C：あまり成り立っていない。 D：ほとんど成り立っていない。</p>
<p>・他校の教員も積極的に参加できる研修会を開催します。：地域の小中学校等の教員のニーズなども積極的に把握し、公開の研修会を年間数回開催します。</p>	<p>・各種研修会の参加者の、アンケートや聞き取り等で、ニーズの把握に努めている。 ・公開講座1回、体験研修2回、講演会2回、夏季特別支援研修9講座を実施。</p>
<p>・地域の小中学校の特別支援学級等在籍児童生徒の保護者やその担任等を支援するため、教育相談、校内研修会の講師や助言者の依頼に積極的に応えていきます。：H特別支援学校の支援部とも連携協力しながら、地域の支援要請に100%応えることを目指します。</p>	<p>・H特別支援学校とS特別支援学校及び地区の特別支援推進委員との連携を図ってきた。 ・地域の要請には都合がつく限り応えている。</p>
<p>・学芸行事・交流及び共同学習の充実：学芸行事、地域交流、学校間交流において内容の充実、相互理解を図る。：アンケート評価点3.2以上を目指す</p>	<p>空欄</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・相談ニーズに応じた地域支援の充実：相談ニーズに応じた地域支援の実施に努める。：アンケート評価点 3.2 以上を目指す。 ・特別支援学校としての在り方についての検討：将来を見据えた本校の在り方についてまとめる。 	空欄
<ul style="list-style-type: none"> ・学校施設等の開放：S 高校から土地、建物を借りているため、施設開放は現在実施していない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者や関係機関と連携を図り、健全な心の育成を図るとともに、自ら学ぶ力や安全に生活を送る力を育成する。 ・職業教育を充実させ、生徒が主体性を持ち、個性を発揮して職業自立できる力を育成する。 ・地域や高等学校との連携を図った教育活動を展開し、生徒が進んで地域生活を送る姿勢を育成する。 ・情報の発信や中学校、高等学校からの教育相談を積極的に進め、地域における特別支援教育のセンター的役割を担う。
<ul style="list-style-type: none"> ・支援センター健康教育 ○地域支援センター的な役割の推進と特別支援教育の推進者としての資質の向上：センターが広報案内した 6 研修会に 79 名の外部参加者があり、地域のセンター的機能を果たすことができた。 ○関係機関とのネットワークの構築：関係機関の方と実際に面談することで関係づくりを進め、関係者とスムーズな連携が図れた。 ○「個別の教育支援計画」の活用：居住地域実習や移行支援会議で、進路支援部や保護者と連携を図り、「個別の教育支援計画」を慎重に有効活用していきたい。 	<p>A：十分実践できた。 B：ほぼ実践できたが課題がある。 C：実践が不十分であった。 D：全く実践できなかった。</p>
<p>交流教育：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・閉鎖的な日常を解放するために、地域の小・中学校等との交流事業を推進する。 ・教職員の地域の学校との交流、研修の機会を設ける。 	<p>A：肯定的な評価が 75% 以上。 B：50% 以上 75% 未満。 C：25% 以上 50% 未満。 D：25% 未満。</p>
<p>センター的機能の発揮：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県内各市町の教育委員会等を訪問し、本校のセンター的機能を周知する。 	<p>A：肯定的な評価が 75% 以上。 B：50% 以上 75% 未満。 C：25% 以上 50% 未満。 D：25% 未満。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・校内外の相談活動を積極的に行い、本校の活動実績を周知する。 	<p>A：肯定的な評価が 75% 以上。 B：50% 以上 75% 未満。 C：25% 以上 50% 未満。 D：25% 未満。</p>

<p>・小・中学校等に在籍する障害のある児童生徒等の教育について、助言援助に努めていますか。:</p> <p>①外部の幼児児童生徒に対する相談を年間10件以上実施している。</p> <p>②小・中学校等からの要請により、研修等の講師を年間3回以上努めている。</p>	<p>空欄</p>
<p>・教育相談活動を充実させ、他機関と連携して地域の学校や視覚障害児者に対する支援センターとしての役割を果たす。:教育相談及び保護者の交流活動の充実を図る。</p>	<p>教育相談及び保護者に向けて交流活動の場を企画・設定し、実施する。(土曜スクール・オータムスクール・体育大会・文化祭・保護者の集い等)</p> <p>A:10回以上、企画した。</p> <p>B:5~9回、企画した。</p> <p>C:1~4回、企画した。</p> <p>D:企画しなかった。</p>
<p>学校、家庭、地域社会における取組</p> <p>・年間計画の検討と人権啓発の取組</p> <p>・人権・同和問題に対する啓発活動の推進</p>	<p>評価の観点</p> <p>・地域の人材等を活用(講話)した取組の推進。</p> <p>・広報活動の充実。</p>
<p>センター的機能の充実</p> <p>・小・中学校等、関係諸機関等からの要請に応じて、具体的で適切な支援ができること。</p>	<p>評価の観点</p> <p>・小・中学校等、関係諸機関等から求められる支援ができたか。</p>
<p>地域を支援するセンター的機能:</p> <p>①校内体制の整備</p> <p>・特別支援コーディネーターの配置による相談支援機能の充実。特設教育相談室の充実。(就学前幼児対象:年少・年中・年長各9回、学齢児対象5回)</p> <p>②相談活動の実施</p> <p>・特別支援コーディネーターの配置による相談支援機能の充実。参加保護者への育児ファイル作成支援の実施。</p> <p>③小・中学校等への支援</p> <p>・教育相談の実施。(随時)</p> <p>・特別支援研修会の実施。(8月に1回)</p>	<p>A:十分良い。</p> <p>B:概ね良い。</p> <p>C:やや不十分。</p> <p>D:不十分。</p>

<p>・開かれた学校</p> <p>①学校施設等の開放</p> <p>・学校施設開放等の規定：学校施設開放事務にかかわる説明資料を整備する。</p> <p>②外部の人材等の活用</p> <p>・授業での地域の人材等の積極的な活用：各学年、グループ年間1回は地域の人材を活用した授業を実施する。</p> <p>③学校評議員の活用</p> <p>・コミュニティ・スクール委員会の具体的な取組実践：委員会の機能が教育活動に反映される。(委員会年3回開催)</p> <p>④理解・啓発活動</p> <p>・ホームページ、回覧板、新聞等を活用した積極的な情報発信：コミュニティホールの活用・継続。ほぼ毎日のネットコモンズによる情報発信。</p> <p>・ボランティア養成講座の推進</p> <p>ボランティア養成講座の実施(初級認定30人)。G市の社協と本校との連携による事業を検討し、1事業実施。</p>	<p>A：十分良い。</p> <p>B：概ね良い。</p> <p>C：やや不十分。</p> <p>D：不十分。</p>
<p>・開かれた学校づくりを目指す特別支援教育センター的機能の推進</p> <p>①学校評議員会や地域特別支援教育連携協議会の機会を捉え、地域の人々に対し、特別支援教育に対する理解と認識を深めるとともに関係者・諸機関とのネットワークの基盤づくりを進める。</p> <p>②地域の幼稚園、小・中学校等への出向教育相談など発達障害児の支援等に努める。</p> <p>③療育センター、幼稚園等の関係機関との連携により個別の就学支援計画を作成し、就学後の支援に資する</p> <p>④教育相談室の積極的な活用を図り、保護者や教員の支援に努める。</p> <p>⑤校内関係部署の連携による支援体制の確立に努める。</p>	<p>空欄</p>
<p>・教育相談の体制を整備し、予定通り相談や支援を実施する。</p>	<p>4：相談・支援体制が整備でき、年間400件以上の相談・支援が実施できた。</p> <p>3：相談・支援体制が整備でき、年間350件以上の相談・支援が実施できた。</p> <p>2：相談・支援体制が整備できたが、年間300件程度の相談・支援にとどまった。</p> <p>1：相談・支援体制の整備ができず、年間250件程度の相談・支援にとどまった。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ 個のニーズに応じた相談や支援を実施する。 	<p>1： 懇談が実施できず、個のニーズに応じた相談や支援が実施できなかった。</p> <p>2： 懇談は行ったが、個のニーズに応じた相談や支援がほとんど実施できなかった。</p> <p>3： 懇談を十分に行い、個のニーズに応じた相談や支援がほぼ実施できた。</p> <p>4： 懇談を十分に行い、個のニーズに応じた相談や支援が実施できた。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の人材活用を図り、地域との交流活動を推進しているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の人材活用を図り、地域との交流活動を推進し、交流祭に 500 人、交流祭に 1,000 人以上の来校者がある。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 特別支援教育の改革を推進しているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ センターの機能の一環として、コーディネーターを中心とした相談活動を実施すると共に、教職員の資質向上のための研修を行い、職員の 80%以上が評価している。
<ul style="list-style-type: none"> ・ センターの役割や社会の要請を理解するために、校内学習会を 2 回実施する。 	<p>空欄</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 小・中学校等に在籍する障害のある児童生徒等の教育について助言・援助に努めています。 ・ 小・中学校等へ研修案内、教材紹介などの情報提供を行う。 ・ 学校間交流や居住地校交流等の機会に、障害者への理解や接し方について、講話や資料により啓発していく。 	<p>A：よく当てはまる</p> <p>B：だいたい当てはまる</p> <p>C：あまり当てはまらない</p> <p>D：まったく当てはまらない</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ センターの役割の実施： 特に地区コーディネーター会議へのかかわりを深める。教育相談では、支援体制制作りに視点を置く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 連携協議会等への積極的参画。教育相談等の実施。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 特別支援教育に関する校内外での理解開発： 教育相談パンフレットを作成する。研修会を年 1 回公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域への理解啓発、関係者の資質向上に努める。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域におけるセンター的役割の充実 「視覚障害幼児教室」「視覚障害親子教室」の指導の充実、各学校支援の充実、全教職員体制による関係機関訪問等を通して支援の質を向上させるとともに啓発活動を推進する。 	<p>A： 相談支援活動が計画に基づいて円滑に実施され、本人、保護者、指導者等から信頼を得るだけの成果があり、相談支援の件数が増えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 視覚障害教育連絡会、学校公開、地域向け講座等の各事業について、昨年を上回る参加者があり、参加者の 8 割以上から高い評価を得ている。 ・ 全校での関係機関訪問を実施し、各訪問者が訪問先より手応えや新しい情報を得ることができる。 ・ 部内研修、ケース討論会をそれぞれ月 1 回以上開催し、支援に必要な総合的知識を高めている。お互いにサジェスチョンしながら、支援に必要な教材等を作成している。

	<p>B：相談支援が計画に基づいて実施され、相談支援件数が増えている。各事業が昨年と同様の規模で実施でき、参加者の8割以上から高い評価を得ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進路指導部と連携し、職員の共通理解のもと、全校で関係機関訪問を実施している。 ・部内研修、ケース討論会を月1回以上開催している。各自の支援について部内で話し合いができてきている。 <p>C：相談支援が、昨年度と同様の規模で実施されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各事業が昨年と同様の規模で実施できる。 ・進路指導部と連携し、全校で関係機関訪問を実施している。 ・年間を通して、部内研修、ケース検討会を開催する。各自が必要な専門性について研修し、スキルを高めている。 <p>D：相談支援の件数が減少している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・件数は、現状維持、もしくは増加傾向にあるが、本人・保護者・指導者からの信頼を得られないと思えるケースが3割以上ある。 ・各事業の参加人数が3割以上減少する。もしくは、参加者の3割以上の方からの評価が低い。 ・部内での研修が定期的には実施できない。または、研修は実施できているが、お互いの支援について意見交換等ができていない。
<p>・小→中→高→社会への移行を考慮した教育課程になっているか。</p>	<p>A：強くそのとおりだと思う。できた。できている。満足できる状態まで到達できた。</p> <p>B：そのとおりだと思う。概して可なり。</p> <p>C：そのとおりだと思うが、問題もある。若干の改善を要する。</p> <p>D：そのとおりだとは思わない。問題があり、改善を要する。</p> <p>※：分からないので、評価しにくい。</p>
<p>・学校のセンター的機能が、地域に十分活用されていると思うか。</p>	<p>A：強くそのとおりだと思う。できた。できている。満足できる状態まで到達できた。</p> <p>B：そのとおりだと思う。概して可なり。</p> <p>C：そのとおりだと思うが、問題もある。若干の改善を要する。</p> <p>D：そのとおりだとは思わない。問題があり、改善を要する。</p> <p>※：分からないので、評価しにくい。</p>

<p>・地域を支援するセンター的機能</p> <p>○センター的機能を推進するために校内体制を整備している。(進路・地域支援課の充実・構成員、人材育成等)</p> <p>○教育相談や就学相談等様々な相談活動を実施している。</p> <p>○地域の小・中学校等に対し、特別支援教育にかかわる研修や相談などの支援をしている</p>	<p>A：十分良い</p> <p>B：概ね良い</p> <p>C：やや不十分</p> <p>D：不十分</p>
<p>・地域のセンター的役割</p> <p>○地区のコーディネーター等が集まる研修会を利用して情報交換会を実施し、学校現場のニーズを把握する。</p>	<p>空欄</p>
<p>・地域の特別支援に関するセンター的な役割を果たしているか。</p> <p>・幼稚園、小・中・高等学校等に在籍する障害のある児童生徒等の教育について、助言援助に努めているか。</p>	<p>・幼稚園、保育所、小中学校への巡回相談の件数が、半年で15件以上ある。</p> <p>・相談会への参加児が、月平均7人以上いる。</p> <p>・市内の学校や園、研究所への研究協力を年10回以上行う。</p> <p>A：十分達成できた。</p> <p>B：達成できた(具体的な数値目標達成)。</p> <p>C：もう少しで達成できた。</p> <p>D：達成できなかった。</p>
<p>・地域生活支援ネットワーク会議では、進路や子育てについて保護者と共通理解を図ることができたか。</p>	<p>A：十分に達成できた(～成果があった、～している等、達成率80%以上)</p> <p>B：達成できた(成果があった、している等、達成率60%以上)</p> <p>C：もう少しで達成できた(少し成果があった、少ししている等、達成率60%以下)</p> <p>D：達成できなかった(成果がなかった、しなかった等、達成率25%以下)</p>
<p>・地域の視覚障害児者のニーズに応じた支援を行う。</p> <p>①相談学級専任担当者2名で相談活動を充実させる。：ひまわり教室を年間60回開き、参加幼児10名を目指す。</p> <p>②行政、福祉と連携して地域で相談会を開き、積極的に地域支援に向かう。：県下3地区で相談会を開催し、関係者も含め50名の参加を目指す。</p> <p>③地域の学校に在籍している子どもの教育相談や成人の来所相談、電話相談をし、支援する。：50人延べ250回の教育相談を目指す。</p> <p>④小中学校等の校内研修会に講師として参加し、視覚障害教育の理解啓発、指導力向上に協力する。：年間5回、講師を派遣する。</p> <p>⑤ボランティア養成事業を開催し、若年ボランティアを養成するとともに視覚障害教育の理解啓発を図る。：講座参加者10名を目指し広報する。講座の講師を教員が協力して務める。</p>	<p>A：目標以上のことが達成できた。</p> <p>B：目標を達成することができた。</p> <p>C：あまり達成できなかった。</p> <p>D：達成できなかった。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・地域特別支援教育に関するセンター的な役割を果たしているか。 ・幼稚園、小・中・高等学校等に在籍する障害のある児童生徒等の教育について、助言援助に努めているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の幼、小、中、高、養護学校の教員、保護者及び児童生徒を対象とした相談業務、支援活動等を実施している。 ・年間10回の学校参観日、年間13回の相談日、随時参観、随時相談、出張相談、電話相談等。 ・校内研修等を年間3回以上地域の幼、小、中、高、養護学校の教員、保護者に公開している。
<ul style="list-style-type: none"> ・理解教育充実部を分掌として独立させ、障害児童・生徒の理解充実を図る。 	<p>4：よい 3：おおむねよい 2：少し課題あり 1：課題あり</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者との日常的な連絡・連携（連絡帳、電話、各種通信等）に努めるとともに、保護者会や個人面談、授業参観や家庭訪問等により、共通理解と信頼関係の深化を図る。 	<p>4：よい 3：おおむねよい 2：少し課題あり 1：課題あり</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・地域のセンター校として、特別支援教育の理解推進と地域支援の充実を図る。 ・特別支援教育の充実のため、センター校としての機能・役割を発揮する。 ・障害幼児の相談・体験教室8月に3日間、参加者30名 	<p>4：よい 3：おおむねよい 2：少し課題あり 1：課題あり</p>

(5) 一人一人に応じた指導

a. 一人一人に応じた対応

①学力向上

- ・個別の指導計画を活用した授業を推進し、一人一人に応じた確かな学力の向上を図ることができたか。

②教材開発

- ・児童生徒一人一人の障害や発達の状態に応じた教材の開発と活用の工夫がなされているか。
- ・一人一人の障害や発達の状態に応じた学習環境の整備に取り組まれているか。

③児童一人一人の実態の共通理解

- ・一人一人の学習状況について、「個別の指導計画」をもとに、職員間で確認する機会が設けられているか。
- ・一人一人の学習状況や学校生活について、職員間で確認する機会が設けられているか。

④児童生徒の実態把握

- ・将来の生活を見据えて指導方法や指導形態の研究を進め、個々の実態に合わせたよりよい支援がなされているか。
- ・個人情報保護に配慮しながら、就学前機関や進路先などと必要な情報をスムーズに交換できているか。
- ・児童生徒の発達段階及び障害の状態に応じた指導の展開に努めているか。
- ・障害の状態に応じた学習環境に配慮しているか。
- ・授業の過程で、個別及び一斉による学習活動に配慮しているか。
- ・学習意欲を高め、自発的な活動を促すように配慮しているか。
- ・学習でつまづいた児童生徒を見過ごさずに、丁寧な指導に努めているか。
- ・児童生徒が成就感・達成感を得られるよう配慮しているか。

⑤児童生徒への対応という観点から

- ・カウンセリングマインドの精神で共感的理解をもって指導児童生徒の指導に当たっているか。

⑥重度化への対応

- ・障害の重度・重複多様化が進む中、一人一人のニーズに応じた教育の充実を図っているか。

⑦授業改善

- ・周囲の人のかかわりや集団における指導を充実させ、コミュニケーション手段の工夫や改善に努め、自己実現力や社会生活への適応力向上を図っているか。

⑧チームアプローチ

- ・「個別の指導計画」に基づく「チームアプローチ」（指導方法）により、一人一人の教育的ニーズに応じた授業を実践しているか。
- ・ティーム・ティーチングの利点を生かした指導に努めているか。

b. 個別の指導計画・個別の教育支援計画の活用

- ・個に応じた指導の計画・実践・評価の推進を行なわれているか。

①計画的な取組

- ・個別の教育支援計画を反映した年間学習指導計画を立案し、実践・評価を行っているか。
- ・個別の支援教育計画、個別の指導計画の理解・定着を図ることができるよう、説明会及びアンケート

トなどを実施しているか。

②組織的・計画的な支援

- ・「個別の教育支援計画」「進路支援の記録」による組織的・計画的な支援がなされているか。
- ・個別の教育支援計画の策定について、職員全体の理解は十分進んでいるか。

③保護者のかかわり

- ・「個別の教育支援計画」「個別指導計画」について、保護者と話し合いの場を設けているか。
- ・個別の指導計画を利用して教科等の個別化を図り、保護者に共通理解を得ながら指導を行っているか。

④関係機関との連携

- ・個別の移行支援計画に対応した関係機関と連携しているか。

⑤寄宿舍教育での活用

- ・「個別の教育支援計画」を学校と寄宿舍が共同で作成し、寄宿舍教育の質の向上を図っているか。

⑥個別移行支援計画の作成と活用

- ・個別移行支援計画を活用しながら、進路体験等を計画的に実施し、個々の生徒に応じた進路支援の充実に努めるか。

⑦実態把握

- ・一人一人の実態に即した教育課程が編成されているか。
- ・個別の教育支援計画や個別指導計画に基づき、児童・生徒一人ひとりの障害の状態や発達段階、学習の意欲や進捗等に応じたきめ細かい指導が行われているか。

⑧人権

- ・個別の指導計画に基づき、人権教育の立場から一人一人の実態等に応じたきめ細かで計画的な指導の充実に努めているか。

表3-5 一人一人に応じた支援に関する評価シートの記載内容

目標及び具体的取組	評価指標・達成段階・評定
<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画・個別の教育支援計画の活用 ○事例研究、授業研究等において指導計画内容の吟味を具体的に進める。 ○特に発達障害を含む児童生徒の支援について検討する。 ○校内委員会を機能させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・プランA・Bが多様な場で活かされたか ・変容に結びつく活用がなされたか。 ・学期、次年度により活かせる手立てができたか ・コーディネーターを中心とした支援活動がなされたか ・校内委員会の機能が発揮されたか <p>A：ほぼ達成（8割以上） B：概ね達成（6割以上） C：変化の兆し（4割以上） D：不十分（4割未満）</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・教育支援計画及び個別の指導計画は、本人保護者 ・教育支援計画の策定及び個別の指導計画の作成改善 	<p>1段階：本人・保護者・関係者の実態や要望等を反映させた内容になっていない</p> <p>2段階：目標手だては、本人・保護者・関係者・学校の共通認識となっている。</p> <p>3段階：半期、1年、3年に一度等の評価がなされ、修正や加筆がなされている。</p> <p>4段階（達成レベル）：各教科等の目標と特例等を理解し、児童生徒に応じた各教科の目標を設定している。</p> <p>5段階：教科等の目標を的確に押さえるとともに、児童生徒の実態等に応じ、明確な理由を基に特例等を適切に適用しながら指導している。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画立案及び実践と評価 	<p>1段階：適切な目標による個別の指導計画を立てているが、授業や評価の際には参考にしていない。</p> <p>2段階：目標・手だて・学習内容が適切な個別指導計画を立て、授業や評価に活用している。</p> <p>3段階：個別の指導計画に示した目標や手だて、学習活動、指導時間を基に授業を行い、評価や通知表作成の際に活用している。</p> <p>4段階（達成レベル）：個別の指導計画に示した目標や手だて、学習活動、指導時間を基に授業を行い、評価を実施し、個別の指導計画の改善を図っている。</p> <p>5段階：個別の指導計画に基づいた授業と評価の活用がシステム化されており、計画から改善までの一連の過程に生かされている。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒一人一人の障害や発達の状態に応じた教材の開発と活用の工夫、学習環境の整備に努めている。 	<p>1段階：教材の開発は行っていないが、一人一人の課題に応じた教材について考えている。</p> <p>2段階：あまり多くの教材は製作していないが、児童生徒の障害や発達に応じた教材の開発を考えている。</p> <p>3段階：日ごろから自作教材を用いるなどして、効果的な指導に努めている。</p> <p>4段階（達成レベル）：児童生徒一人一人の課題を解決するための教材の開発や教材研究がなされ、教材を活用した指導方法について検討され、効果的な指導がされている。</p> <p>5段階：作成した教材と活用の仕方（授業）が整理され、学校全体で活用できるようになっている。</p>

・個に応じた学習指導を行っているか。	・一人一人の学習状況について、職員間で確認する機会を年間3回以上設けている。
・個別の指導計画の充実：個別の指導計画に関して教職員集団との話し合いを十分する。	・個のケースについて指導目標を共通生かしながら授業を進め、評価等の話し合いができたか。 A：よくできた。 B：だいたいできた。 C：あまりできなかった。 D：ほとんどできなかった。
・個別の教育支援計画の充実：学校からの働きかけで、医療スタッフ、療育スタッフとで児童生徒についてのケース会議をもつ。必要に応じて、保護者も入る。	ケース会議を A：在籍児童生徒全員 B：在籍児童生徒のうち4人 C：在籍児童生徒のうち3人 D：在籍児童生徒のうち2人についてもつことができた
・一人一人の障害や家庭での養育の状況を的確に把握するとともに、当校の個別の教育支援計画と施設の個別支援計画との連携を図り適切な教育的支援ができる教育課程を編成する。	・個別の教育支援計画検討委員会での検討回数：年3回 A：達成した。 B：ほぼ達成した。 C：現状維持。 D：現状より悪くなった。
・一人一人の将来像を描き、系統性・継続性を重視し、個に応じた教育内容を精選する。	A：達成した。 B：ほぼ達成した。 C：現状維持。 D：現状より悪くなった。
・一人一人に応じた支援の在り方を探り、主体的に学習に取り組む児童を育てる。	A：達成した。 B：ほぼ達成した。 C：現状維持。 D：現状より悪くなった
・個別の教育支援計画：将来の生活を見据えて個々の実態に合わせたよりよい支援を行う。	・日常会話の際、幼児児童生徒に誤音の原因をつかみ、正しい発音要領を伝える。 ・言葉のリズムをつかませ、発語を促す。 ・口声模倣を促す。 4：十分達成できている。 3：おおむね達成できている。 2：どちらかというとな達成できていない。 1：ほとんど達成できていない。

<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人に応じた確かな学力の向上を図る。 ①読書の幅を広げ読書の楽しさを味わうことができるようにする。 ②一人一人に応じた言語力を高め、表現する力を向上させる。 ③一人一人の発達に応じた学校生活重点目標ができるよう指導する。 ④一人一人の実態に応じ既習内容の定着を図り自ら定めた目標が達成できるよう支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聴力測定を定期的に行い、補聴器の管理をする。 ・個々の障害に応じて、指導回数を確保する。 ・一人一人の実態に応じて、きめ細やかなことばの指導等をする。 ・家庭や学校での様子について保護者から状況を説明し、子どもの特性に応じて適切な支援を継続する。 <p>4：十分達成できている。 3：おおむね達成できている。 2：どちらかというとな達成できていない。 1：ほとんど達成できていない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・生活に生かせる「読み」の力を高めるとともに、正しい書き言葉を身につける。 ・個々に応じて情報機器を活用できる児童生徒を育成する。 ・「個別の教育支援計画」を一人一人に応じて有効に活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談依頼書を事前に出してもらい、相談内容を的確に把握する。 ・遠隔地に直接で向いて、教育相談を年2回開催する。 ・相談の内容を必要に応じて学校にも報告する。 <p>4：十分達成できている。 3：おおむね達成できている。 2：どちらかというとな達成できていない。 1：ほとんど達成できていない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・「個別の指導計画」(基本計画)と「週案」(実践計画)に基づく「チームアプローチ」(指導方法)により、一人一人の教育的ニーズに応じた授業を実践している。 ・周囲の人のかかわりや集団における指導を充実させ、「コミュニケーション手段の工夫・改善」に努め、自己実現力や社会生活への適応力向上を図っている。 ・「作業学習」(中・高で実施)や「展示販売会」(中・高で年1回実施)を通して、働くことの意義や喜びについて学べるよう実践している。 ・「職場・施設見学」「現場実習」「校内実習」(中・高で実施)等の体験学習を通して、職場の実際を体験し、「働く力」を身につけるように実践している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担当者と管理職が、行政機関に一学期に直接出向き、教育相談業務の紹介を行い、連携を強化する。 <p>4：十分達成できている。 3：おおむね達成できている。 2：どちらかというとな達成できていない。 1：ほとんど達成できていない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・「学園や家庭との連携」を密にして、有効活用できる「個別の教育支援計画」を作成し、児童生徒一人一人が学校と家庭・地域で充実した生活を送ることができるような支援をしている。 	<p>空欄</p>

<p>個別指導計画の充実</p> <p>①個別教育支援計画を踏まえての個別の指導計画の立案・指導の在り方の検討</p> <p>②個別の指導計画の見直し</p> <p>③個別の指導計画の活用</p>	<p>空欄</p>
<p>・カウンセリングマインドの精神で児童生徒の指導に当たる</p> <p>①共感的理解をもって指導に当たる。</p> <p>②いじめや人が嫌な気持ちになるような発言に対する対応。</p> <p>③児童・生徒が今日も学校へ行こうという気持ちになる学校作り。</p>	<p>①の項目について、</p> <p>4：カウンセリングマインドの精神で十分に対応した。</p> <p>3：カウンセリングマインドの精神で対応した。</p> <p>2：カウンセリングマインドの精神をあまり考慮せずに対応した。</p> <p>1：カウンセリングマインドの精神を全く考慮せず対応した。</p> <p>②の項目について、</p> <p>4：すぐに十分対応した。</p> <p>3：すぐに対応した。</p> <p>2：少し対応した。</p> <p>1：対応しなかった。</p> <p>③の項目について、</p> <p>4：十分できた。</p> <p>3：まあまあできた。</p> <p>2：少しできた。</p> <p>1：あまりできなかった。</p>
<p>・学部会、懇談会等を通して「個別の教育支援計画」を作成し、個に応じた支援構想を作る。：(取組指標) 個別の教育支援計画を子どもの指導・支援に生かす。</p>	<p>・学部会等を通して共通理解を図り、個に応じた支援構想が、</p> <p>A：十分できた。</p> <p>B：まあまあできた。</p> <p>C：あまりできなかった。</p> <p>D：全くできなかった。</p> <p>・授業の指導方法や年間指導計画について個別の教育支援計画を</p> <p>A：十分に活用して1年間実施した。</p> <p>B：定期的に活用して実施した。</p> <p>C：あまり活用せず実施した。</p> <p>D：全く活用しなかった。</p>
<p>・個別の教育支援計画の活用と改善を図るとともに、重複学級担任や教科担当者どうしの連携を促進する。</p> <p>①個別指導計画などのファイルを整理し、書式の追加、改善を行う。</p> <p>②重複学級担任と教科指導担当者が連携した話し合いを行う。</p>	<p>空欄</p>

<p>・児童生徒一人ひとりに応じた指導目標を設定し、目標達成のために適切な手立てを講じていくこと。(個別の指導)</p>	<p>空欄</p>
<p>・適切な評価サイクルによる個別の指導計画に基づく授業改善の継続とともに、個別の教育支援計画様式等の再検討を図る。</p> <p>○個別の教育支援計画説明会 ○教育相談会 ○個別の指導計画 ○授業改善 ○評価サイクルの確定</p>	<p>A：達成されている。 4点 B：ほぼ達成されている。 3点 C：あまり達成されていない。 2点 D：達成されていない。 1点</p>
<p>①個々の実態や課題を考慮した教育課程の工夫。 ②児童生徒の実態に応じた個別の配慮に基づく教育活動に取り組んでいる。 ②教育課程の編成と実施との関連を図っている。</p>	<p>5：取り立てて問題が発生しない限り達成できるレベル。 4：わずかな努力で達成できるレベル。 3：努力すればできる目標のレベル。 2：かなりの努力を要するレベル。 1：一生懸命にやってやっと達成できるレベル。</p>
<p>・個別の指導計画の作成・利用</p> <p>①作成の意義や手順について教職員が共通理解をしている。 ②作成に必要な諸様式を整備し、保管や活用に配慮している。 ③作成にあたり、諸検査等で実態を把握したり、保護者や関係機関から情報を収集したりしている。 ④実態把握から導き出された重点課題等を具体的に指導方針に設定している。 ⑤高等部では、卒業後の進路を意識して個別移行支援計画を立て、効果的な運用を進めている。</p>	<p>5：取り立てて問題が発生しない限り達成できるレベル 4：わずかな努力で達成できるレベル 3：努力すればできる目標のレベル 2：かなりの努力を要するレベル 1：一生懸命にやってやっと達成できるレベル</p>
<p>・児童生徒の実態に応じた指導の展開</p> <p>①発達段階及び障害の状態に応じた指導の展開に努めている。 ②障害の状態に応じた学習環境に配慮している。 ③授業の過程で、個別及び一斉による学習活動に配慮している。 ④学習意欲を高め、自発的な活動を促すように配慮している。 ⑤学習でつまづいた児童生徒を見過ごさずに、丁寧な指導に努めている。 ⑥児童生徒が成就感・達成感を得られるよう配慮している。 ⑦ティーム・ティーチングの利点を生かした指導に努めている。</p>	<p>5：取り立てて問題が発生しない限り達成できるレベル 4：わずかな努力で達成できるレベル 3：努力すればできる目標のレベル 2：かなりの努力を要するレベル 1：一生懸命にやってやっと達成できるレベル</p>

<p>・個のニーズに応じた計画の作成</p> <p>①作成の趣旨や手順について教職員が共通理解をしている。</p> <p>②学部担当者等が連携を図り、自立活動の指導内容・方法について組織的に検討している。</p> <p>③児童生徒の実態把握や学習指導要領を下に、個別の指導計画を作成している。</p> <p>④児童生徒が主体的に活動できるよう内容に配慮している。</p> <p>⑤児童生徒の障害の状態に応じ、授業時数を適切に設定している。</p> <p>⑥実践の評価を踏まえ、指導計画に工夫や改善を図っている。</p>	<p>5：取り立てて問題が発生しない限り達成できるレベル</p> <p>4：わずかな努力で達成できるレベル</p> <p>3：努力すればできる目標のレベル</p> <p>2：かなりの努力を要するレベル</p> <p>1：一生懸命にやってやっと達成できるレベル</p>
<p>・「個別指導計画」に基づく自立活動の指導</p> <p>①指導計画の個別化と具体化： 的確な実態把握に基づき、個別の目標・内容・方法を具体化して指導計画を作成している。</p> <p>②自立を促す指導の工夫と評価： 自立する力を育てる指導の工夫を実施している。</p>	<p>A：十分良い</p> <p>B：概ね良い</p> <p>C：やや不十分</p> <p>D：不十分</p>
<p>・児童生徒や保護者及び地域社会のニーズを把握し、「個別の教育支援計画」策定に努めている。</p>	<p>4：思う（よい）</p> <p>3：ほぼ思う（だいたいよい）</p> <p>2：あまり思わない（あまりよくない）</p> <p>1：思わない（よくない）</p> <p>N：ノーアンサー（わからない）</p>
<p>・児童生徒一人一人の重点課題を明らかにし、「個別の指導計画」の作成・実施・評価に取り組んでいる。</p>	<p>4：思う（よい）</p> <p>3：ほぼ思う（だいたいよい）</p> <p>2：あまり思わない（あまりよくない）</p> <p>1：思わない（よくない）</p> <p>N：ノーアンサー（わからない）</p>
<p>・個別の指導計画を活用した授業を推進し、基礎学力の向上を図る。</p>	<p>空欄</p>
<p>・個別の教育支援計画・ニーズの把握と支援プランの作成</p> <p>○保護者と連携を図りながら、少なくとも1カ所は外部関係機関と話し合いの機会をもつ。</p> <p>○保護者と協働して策定していく過程で、必要な関係機関と中・長期的な支援目標や支援プランについて必ず話し合う。</p> <p>○「個別の教育支援計画」策定とその活用について、また、「個別の指導計画」等との関連について、実践研究を行う。</p> <p>○園との各種会合への参加や保護者会の開催を通して生徒のニーズの把握や適切な支援プランの策定に努める。</p>	<p>空欄</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別の指導計画 * 実態の把握と適切な指導計画の作成。 * 個別の指導計画に基づく指導の充実。 * 個に応じた目標・指導内容・手だての適正化。 各学期初のケース会（年間3回以上）の実施で、具体的な目標・手だてを設定し、指導・支援の充実を図る。: ○ グループ毎にケース回をもち、児童の実態及び指導目標と内容の共通理解を図る。また、目標その他の見直しを必要に応じて行う。 ○ 計画、実践、評価を繰り返し行うことにより、児童の実態に応じた指導方法を探る。 ○ 「個別の指導計画」の活用に関する研修会や授業検討会を実施する。また、ビデオ視聴による研修会を実施する。 	<p>空欄</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「個別の教育支援計画を活用」し、進路先への円滑な移行を図るとともに、卒業後の継続的な支援と情報収集を行っている。 ・ 個別の移行支援計画については、近隣の養護学校での移行支援の情報や各施設が必要としている情報について収集中で、それをもとに今年度中に支援方法を確定して来年度より実施する方向で検討。 	<p>4：十分達成できている、進歩している、または今年度特に工夫、改善がみられた。 3：概ね達成できている、進歩しているが、部分的に工夫、改善の余地がある。 2：どちらかという達成できていない、進歩していない、工夫・改善を検討すべき。 1：ほとんど達成できていない、進歩していない、工夫・改善すべきである。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 個に応じた指導の計画・実践・評価の推進を行う。 ・ 個別の支援教育計画、個別の指導計画の理解・定着を図ることができるよう、説明会及びアンケートなどを実施する。 	<p>A：説明会及びアンケート等を通して、個別の教育支援計画・個別の指導計画の理解・定着を図ることができた。 B：説明会及びアンケート等を通して、個別の教育支援計画・個別の指導計画に対する理解・定着をおおむね図ることができた。 C：AおよびBにあてはまらない。 ?：わからない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別の移行支援計画の整備と活用の充実に努める。 ・ 保護者、職員（特に担任）への進路に関する情報を提供し、進路相談が円滑に進むように配慮する。 	<p>A：進路支援部等で制度や施設の情報あらかじめ整理し、相談に必要な資料等をまめに伝えることができた。 B：進路に関する保護者からの要望や質問に適切に返答することができた。 C：情報伝達の遅れや資料等の準備不足があった。 ?：わからない</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 個に応じたきめ細やかな指導を行っているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人の学習の状況について、「個別の指導計画」を基に教員間で確認する機会を年間3回以上設けている。「個別の指導計画」の実態と目標について学期毎に保護者面談を通じて確認する。 ・ 学期毎の成績会議、事例研修、毎月、毎週の指導グループ別会議等の中で、生徒一人一人の学習状況を確認する。

<p>・個に応じたきめ細やかな指導を行っているか。</p>	<p>・「個別の指導計画」について保護者と少なくとも1回は話し合い、その80%以上から理解を得ている。</p>
<p>・個別の教育支援体制の策定（教務課）年度当初や学期ごとに、保護者に指導計画や教育支援計画を十分説明しているとはいえない。</p>	<p>（努力指標）個々の生徒に関する指導のねらいや病状等に関し、十分な説明を行ったか。</p> <p>A：保護者懇談会以外にも説明がある。</p> <p>B：保護者懇談会の折に説明がある。</p> <p>C：1回だけ受けた。</p> <p>D：まだ説明を受けていない。</p>
<p>・小・中・高校との連携・教育相談（コーディネーター会）心身症や発達障害等の児童生徒に対する理解が不十分で、適切な対応がとられていない場合がある。</p>	<p>（努力指標）少しでも多くの学校が適切に対応できるように理解・啓発を行う。</p> <p>A：参加者の70%以上が理解を得た。</p> <p>B：参加者の60%以上が理解を得た。</p> <p>C：40%前後の理解にとどまる。</p> <p>D：30%未満の理解であった。</p>
<p>・個別の教育支援計画の作成</p>	<p>・数値目標：100%</p> <p>2：達成した（予定を含む）。</p> <p>1：達成できない。</p>
<p>・個に応じた学習内容と年間計画を立て、子供が主体となる指導を工夫し、個に応じた評価を行っている。</p> <p>○個別の教育支援計画を反映した年間学習指導計画を立案し、実践・評価を行っている。</p>	<p>A：達成できている。</p> <p>B：どちらかといえば達成できている。</p> <p>C：どちらともいえない。</p> <p>D：達成できていない。</p>
<p>・個別の教育支援計画や移行計画を作成・活用している。</p> <p>○個人情報の保護に配慮しながら、就学前機関や進路先などと必要な情報をスムーズに交換できているか。</p>	<p>A：達成できている。</p> <p>B：どちらかといえば達成できている。</p> <p>C：どちらともいえない。</p> <p>D：達成できていない。</p>
<p>・個に応じた計画的な進路指導が行われていたか。</p>	<p>4：よい。</p> <p>3：ふつう。</p> <p>2：改善が必要である。</p> <p>1：大幅な改善が必要である。</p>
<p>・個に応じた運動内容等の工夫がなされたか。</p>	<p>4：よい。</p> <p>3：ふつう。</p> <p>2：改善が必要である。</p> <p>1：大幅な改善が必要である。</p>
<p>・「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の策定など校内の支援は、円滑に進めることができたか。</p> <p>・家庭・地域及び関係機関と連携を図り、「ミーティング」の企画・実施は、円滑に進めることができたか。</p>	<p>4：よい。</p> <p>3：ふつう。</p> <p>2：改善が必要である。</p> <p>1：大幅な改善が必要である。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・個別の教育支援計画及び支援会議による支援の充実 ○児童・生徒及び保護者の教育的ニーズに応じた支援の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート評価点 3.2 以上を目指す。
<ul style="list-style-type: none"> ・「個別の指導計画」による充実した指導・支援と効果的な活用 ○「個別の指導計画」に基づき、児童・生徒、保護者のニーズに応じた適切な指導・支援との効果的な活用を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート評価点 3.2 以上を目指す。
<ul style="list-style-type: none"> ・外部人材等の活用：地域の施設や人材等を教育活動に活用している。 ・個別の教育的ニーズの考慮：一人一人の教育的ニーズに即した年間計画を作成している。 ・指導計画の個別化と具体化：適切な実態把握に基づき、個別の目標・内容・方法を具体化して指導計画を作成している。 ・自立を促す指導の工夫と評価：情緒や行動面で配慮の必要な生徒について、個別または集団で指導し、目標達成の評価を実施している。 	<ul style="list-style-type: none"> ア：保護者や関係機関と連携を図り、健全な心の育成を図るとともに、自ら学ぶ力や安全に生活を送る力を育成する。 イ：職業教育を充実させ、生徒が主体性を持ち、個性を發揮して職業自立できる力を育成する。 ウ：地域や高等学校との連携を図った教育活動を展開し、生徒が進んで地域生活を送る姿勢を育成する。 エ：情報の発信や中学校、高等学校からの教育相談を積極的に進め、地域における特別支援教育のセンター的役割を担う。
<ul style="list-style-type: none"> ・進路支援 ○「個別の教育支援計画」「進路支援の記録」による組織的・計画的な支援：支援センターと協力して5回の会議を開催し、卒業後の進路開拓に向け相談機関や支援者の確保を進めた。 	<ul style="list-style-type: none"> A：十分実践できた。 B：ほぼ実践できたが課題がある。 C：実践が不十分であった。 D：全く実践できなかった。
<ul style="list-style-type: none"> ・個に応じたきめ細かな指導を行っているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の学習の状況について、「個別の指導計画」を基に教員と学園職員や保護者との間で確認する機会を年間3回以上設けている。 ・専門的な研修に教員一人当たり年間3回以上参加している。
<ul style="list-style-type: none"> ・自立と社会参加を目指し、児童のニーズを踏まえた系統的、計画的な指導・支援を実践する。 ○児童の特性を踏まえた「プロフィール」作成を目指し、チームを単位として児童の状態の背景読み取りを行うとともに、読み取りの記載について工夫する。 ○一人一人の指導のビジョンが見える個別の指導計画や個別の教育支援計画を作成する。 ○個別の指導計画を踏まえ、各授業で個々の児童への目標、内容、方法、手立ての工夫、細分化を行い、一人一人を活かす授業づくりのために話し合い、授業評価、反省を計画的に実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> A：十分達成できている。 B：達成できている。 C：概ね達成できている。 D：不十分である。 E：できていない。

<ul style="list-style-type: none"> ・個々の幼児児童生徒の実態に応じた指導体制作りと教育課程の適切な編成に努める。 ○個別の指導計画を作成し、基礎学力の定着と向上を図る。また、個々の能力の伸長を目指す指導を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の実態に合った具体的な達成目標を設定する。 A：十分設定できた。 B：おおむね設定できた。 C：あまり設定できなかった。 D：設定できなかった。 ・必要な支援を行い、個々の目標を達成する。 A：十分達成できた。 B：おおむね達成できた。 C：あまり達成できなかった。 D：達成できなかった。
<ul style="list-style-type: none"> ・「個別の指導計画」に基づく自立活動の指導 ・指導計画の個別化と具体化 ○A、B両課程の自立活動、個別の指導計画の押さえを検討し、明確にしていく。 ・自立を促す指導の工夫と評価 ○自立活動で活用できる教材・教具及び技能習得についての学習会を計画し、実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> A：十分良い。 B：概ね良い。 C：やや不十分。 D：不十分。
<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画に基づく授業実践 	<ul style="list-style-type: none"> A：しっかり検討された個別の指導計画に基づいて授業を行い、この狙いが十分達成できた。 B：個別の指導計画に基づいて学習指導計画を立て、概ねねらいに応じた授業実践を行った。 C：ニーズに応じて個別の指導計画を立てたが、ねらいに応じた授業になりにくかった。 D：個別の指導計画が十分検討されず、ねらいを意識した授業ができなかった。
<ul style="list-style-type: none"> ・個々の児童生徒の能力、特性に応じた個別の指導計画を作り実践していく。 ・個々の児童生徒の能力、特性に応じた個別の指導計画を作成し、その指導計画を基に、適切な指導を行っている。 ・個別の指導計画の充実を図り、一人一人の特性を考慮した授業計画を立て、実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> 4：十分達成している。 3：おおむね達成している 2：どちらかというとは達成されていない。 1：ほとんど達成されていない。
<ul style="list-style-type: none"> ・「個別の教育支援計画」の内容の充実を図れるように積極的にかかわっていく。 ・個別の支援計画について、進路先等の意見を聞きながら改善に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 4：十分達成している。 3：おおむね達成している 2：どちらかというとは達成されていない。 1：ほとんど達成されていない。
<ul style="list-style-type: none"> ・交流教育の見直しを行い、交流教育に対する共通理解と実践の進化を行う。 ・本校においては、交流教育の共通理解を図ることができたが、実施に当たっては本校の体勢、相手校の教育課程などの課題が出てきた。居住地校交流については、今年度中学部にも拡大。アンケートをもとに希望者について今年度中に進める予定である。 	<ul style="list-style-type: none"> 4：十分達成している。 3：おおむね達成している 2：どちらかというとは達成されていない。 1：ほとんど達成されていない。

<ul style="list-style-type: none"> ・「個別の教育支援計画」「個別指導計画」について、保護者と話し合いの場を設けているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「個別の教育支援計画」「個別指導計画」について、保護者の80%以上から理解を得ている。 ・「個別の支援教育計画」が有効に活用されていると保護者の80%以上が答えている。
<ul style="list-style-type: none"> ・増している地域の学校・保護者のニーズに対応するための校内体制（センター的機能）の組織的整備を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の学習や生活の状況について、「個別の指導計画」等に基づき教員間で確認する機会を年6回以上設けている。
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者、地域、関係機関との共通理解が深まり、有効な支援が行われています。 ・保護者との個別面談で「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」について話し合う。 ・保護者と日常的な情報交換を密に行う。 ・「個別の指導計画」を保護者・学校・関係機関と共有する機会を積極的に設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> A：よく当てはまる。 B：だいたい当てはまる。 C：あまり当てはまらない。 D：まったく当てはまらない。
<ul style="list-style-type: none"> ・学期1回は「個別の指導計画」にかかわる個別面談を設定し、作成、実施、評価の充実を図る。 ・指導者間で定期的に授業準備、教材教具の検討、評価、改善のために打ち合わせを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> A：よく当てはまる。 B：だいたい当てはまる。 C：あまり当てはまらない。 D：まったく当てはまらない。
<ul style="list-style-type: none"> ・他の分掌部との連携を基にした「個別の教育支援計画」の改善：「個別の教育支援計画」を基にした授業づくりを進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「個別の教育支援計画」の活用
<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画に基づくケース会議を年間5回以上実施する。 ・個別の移行支援計画に対応した関係機関と連携する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画に基づくケース会議の実施 4：ケース回答を6回以上実施した。 3：ケース回答を5回以上実施した。 2：ケース回答を4回以上実施した。 1：ケース回答を3回以上実施した。 ・関係機関との連携 4：関係機関と十分連携することができた。 3：関係機関と必要に応じて連携することができた。 2：関係機関と連携したが不十分であった。 1：関係機関と連携することができなかった。
<ul style="list-style-type: none"> ・開かれた学校（学部）づくりの推進：再生プロジェクト会の実施、学校評価の充実、授業公開ウィークの設定、学校ホームページの充実等を通して、開かれた学校づくりを推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 再生プロジェクト会（年間5回）、外部評価委員会（年間2回）、第三者評価委員会（年間1回以上）、学校公開ウィーク（年間5週以上）について A：開催され、そこから得た意見等が随時、学校教育に反映されている。 B：ほぼ予定通り開催され、そこから得た意見等がほぼ反映されている。 C：半数以上が開催され、そこから得た意見等が反映されつつある。 D：3分の1程度が開催され、そこから得た意見等が少しは反映されている。

<p>・ 寄宿舍教育の充実：「個別の教育支援計画」を学校と寄宿舍が共同作成したり、寄宿舍職員のコミュニケーション技術等を向上させたりすることによって、寄宿舍教育の質を向上させる。また、昨年度から実施している生徒指導の充実を図る。</p>	<p>A：聾生担当指導員が年間4回以上聾学校の手話研修会に参加し、日常生活でよく使う手話を理解し、使えるようになっている。「個別の教育指導計画」が学校と寄宿舍との連携のもとに作成され、日々の指導にとっても有効的に活用されている。舎生同士の障害理解等が促進され、舎生が意欲的に「会」の活動に取り組んでいる。</p> <p>B：聾生担当指導員が年間3回以上聾学校の手話研修会に参加し、日常生活でよく使う手話を理解し、だいたい使えるようになっている。「個別の教育指導計画」が学校と寄宿舍との連携のもとに作成され、日々の指導にほぼ有効的に活用されている。舎生同士の障害理解等が促進され、舎生が意欲的に「会」の活動に取り組つつある。</p> <p>C：聾生担当指導員が年間2回以上聾学校の手話研修会に参加し、日常生活でよく使う手話について、関心は持っているが使うことができない。「個別の教育指導計画」が学校と寄宿舍との連携のもとに作成されたが、日々の指導にあまり有効に活用されていない。舎生同士の障害理解等が促進されたが、「会」の活動は活発ではなかった。</p> <p>D：一部の聾生担当指導員しか聾学校の手話研修会に参加しておらず、指導員の手話理解・獲得は進まなかった。「個別の教育指導計画」は学校と寄宿舍との連携のもとに作成されたが、日々の指導にあまり有効に活用されなかった。舎生同士の障害理解等は促進されず、「会」の活動は活発ではなかった。</p>
<p>・ 個別の教育支援計画の策定について、職員全体の理解は十分進んでいると思いますか。</p>	<p>A：強くそのとおりだと思う。できた。できている。満足できる状態まで到達できた。</p> <p>B：そのとおりだと思う。概して可なり。</p> <p>C：そのとおりだと思うが、問題もある。若干の改善を要する。</p> <p>D：そのとおりだとは思わない。問題があり、改善を要する。</p> <p>※：分からないので、評価しにくい。</p>
<p>・ 早期教育相談、専門相談員派遣等において、幼児児童生徒及びその保護者や担当教員を対象とした教育相談を推進する。</p>	<p>・ 保護者及び担当教員のアンケート結果で満足できた割合は、</p> <p>A：70%以上</p> <p>B：50%～70%未満</p> <p>C：20%～50%未満</p> <p>D：20%未満</p>

<p>・個別移行支援計画を活用しながら、進路体験等を計画的に実施し、個々の生徒に応じた進路支援の充実に努める。</p>	<p>A：コーディネーターが中心となり、担任、保護者及び関係諸機関と、個別移行支援計画を活用した進路相談会議等を年間3回開催した。</p> <p>B：コーディネーターが中心となり、担任、保護者及び関係諸機関と、個別移行支援計画を活用した進路相談会議等を2回開催した。</p> <p>C：コーディネーターが中心となり、担任、保護者及び関係諸機関と、個別移行支援計画を活用した進路相談会議等を年間1回開催した。</p> <p>D：個別移行支援計画を活用した進路相談会議等を開催することができなかった。</p>
<p>・一人一人の実態に即した教育課程の編成。</p>	<p>A：十分良い。</p> <p>B：概ね良い。</p> <p>C：やや不十分。</p> <p>D：不十分。</p>
<p>・「個別の指導計画」に基づく自立活動の指導。</p> <p>①指導計画の個別化と具体化。</p> <p>②自立を促す指導の工夫と評価。</p>	<p>A：十分良い。</p> <p>B：概ね良い。</p> <p>C：やや不十分。</p> <p>D：不十分。</p>
<p>・経験を広める交流教育。</p>	<p>A：十分良い。</p> <p>B：概ね良い。</p> <p>C：やや不十分。</p> <p>D：不十分。</p>
<p>・教育課程</p> <p>○個別の教育支援計画を活用した年間指導計画の充実及び肢体不自由児に対応した教育課程の見直し。：個別の教育支援計画と年間指導計画を関連付ける手順表の活用と見直しを図る。</p>	<p>空欄</p>
<p>○個別の指導計画を利用して教科等の個別化を図り、保護者に共通理解を得ながら指導を行う。</p>	<p>空欄</p>
<p>・個に応じたきめ細かな指導を行っているか。：一人一人の学習状況について、「個別の指導計画」をもとに、職員間で確認する機会を年間4回以上設けている。</p>	<p>A：十分達成できた。</p> <p>B：達成できた（具体的数値目標達成）。</p> <p>C：もう少しで達成できた。</p> <p>D：達成できなかった。</p>
<p>・「個別の教育支援計画」について、保護者と話し合い、保護者の願いを重視して作成しているか。</p>	<p>A：十分に達成できた（～成果があった、～している等、達成率80%以上）。</p> <p>B：達成できた（成果があった、している等、達成率60%以上）。</p> <p>C：もう少しで達成できた（少し成果があった、少ししている等、達成率60%以下）。</p> <p>D：達成できなかった（成果がなかった、しなかった等、達成率25%以下）。</p>

<p>・一人一人の学習状況や学校生活について、職員間で確認する機会を月2回以上設けているか。</p>	<p>A：十分に達成できた（～成果があった、～している等、達成率80%以上）。</p> <p>B：達成できた（成果があった、している等、達成率60%以上）。</p> <p>C：もう少しで達成できた（少し成果があった、少ししている等、達成率60%以下）。</p> <p>D：達成できなかった（成果がなかった、しなかった等、達成率25%以下）。</p>
<p>・「個別の指導計画」や指導の方針について話し合った結果、保護者は理解してくれたと思うか。</p> <p>・「個別の指導計画」に基づいて行った指導（授業）に保護者は満足していると思うか。</p>	<p>A：十分に達成できた（～成果があった、～している等、達成率80%以上）。</p> <p>B：達成できた（成果があった、している等、達成率60%以上）。</p> <p>C：もう少しで達成できた（少し成果があった、少ししている等、達成率60%以下）。</p> <p>D：達成できなかった（成果がなかった、しなかった等、達成率25%以下）。</p>
<p>・障害の重度・重複化、多様化が進む中一人一人のニーズに応じた教育の充実を図る。</p> <p>①個別の指導計画、教育支援計画を立てる。：個別の指導計画、個別の教育支援計画を5月末までに全員作成する。9月に見直しをして、修正する。</p> <p>②指導方法や指導形態の研究を進める。：公開授業習慣を6月に設定し、2つの指定授業と研究協議会を行い、授業改善を図る。</p> <p>・本校の授業評価表を改訂する。</p> <p>・5年次研、10年次研の授業研等を学部の授業研と兼ね、授業改善に取り組む。</p> <p>・専門グループ別の研修を月1回実施して、日常の授業に生かす。</p>	<p>A：目標以上のことが達成できた。</p> <p>B：目標を達成することができた。</p> <p>C：あまり達成できなかった。</p> <p>D：達成できなかった。</p>
<p>・個別の教育支援計画や個別指導計画に基づき、児童・生徒一人ひとりの障害の状態や発達段階、学習の意欲や進捗等に応じたきめ細かい指導をする。</p>	<p>4：よい。</p> <p>3：おおむねよい。</p> <p>2：少し課題あり。</p> <p>1：課題あり。</p>
<p>・個別指導計画に基づき、人権教育の立場から一人一人の実態等に応じたきめ細かで計画的な指導の充実に努める。</p>	<p>4：よい。</p> <p>3：おおむねよい。</p> <p>2：少し課題あり。</p>

